館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第58集

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第58集

館林市内遺跡発掘調査報告書

― 平成31年度・令和元年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 ―

広内町１遺跡　（平31地点）
北小袋遺跡　（令元地点）
大街道遺跡　（令元地点）
間堀１遺跡　（令元地点）
館林城跡・城下町　（令元地点）
大袋Ⅰ遺跡　（令元地点）
天神遺跡　（令元地点）
館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡　（令元地点）

２０２０
館林市教育委員会

令和2年度（2020）
館林市教育委員会

文化財愛護シンボルマーク

http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第58集

館林市内遺跡発掘調査報告書

― 平成31年度・令和元年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 ―

広内町１遺跡	（平31地点）
北小袋遺跡	（令元地点）
大街道遺跡	（令元地点）
間堀１遺跡	（令元地点）
館林城跡・城下町	（令元地点）
大袋Ⅰ遺跡	（令元地点）
天神遺跡	（令元地点）
館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡	（令元地点）

２０２０
館林市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成31年度・令和元年度に国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。平成31年度の調査地点名は「平31地点」、令和元年度の調査地点名は「令元地点」とする。
広内町１遺跡　間堀１遺跡　北小袋遺跡　大街道遺跡　館林城跡・城下町　大袋Ⅰ遺跡
天神遺跡　館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡
3．平成31年度・令和元年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担　当　課	文化振興課（文化財係）
教　育　長	小野　　定
教育次長	青木　伸行
文化振興課長	戸叶　俊文
文化財係長	阿部　弥生
主　　任	奈良　純一（副担当）
主　　任	田沼　美樹
主　　任	宮田　圭祐（担当）
主　　事	小林　松嗣
主　　事	小林　里穂

4．調査作業員・整理作業員（50音順敬称略）
小倉　政義　　久保田憲司　　小島　鉄男　　杉田　和実　　須永　広美　　須永　欣伸
津布工りり子　　寺嶋　美雪　　中澤　　悟　　西谷　義信　　早川　裕正　　原田　和沙
半田　　博　　前田　清美　　三橋　瑞江　　八代　昌明　　若江　　智　　渡辺　孝一
5．出土遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。
6．本書の編集・執筆は、宮田が中心となり行った。
7．遺物の実測・観察表およびその他の図版作成は、宮田・原田・前田・三橋で行った。
8．調査の実施および本書刊行にあたり、下記の方々のご協力をいただいた。ここに記して感謝申しあげる次第である。（順不同、敬称略）
地権者各位　　大西　雅広　　黒澤　照弘　　佐藤　孝之　　澤口　　宏　　新倉　明彦
群馬県教育委員会事務局文化財保護課　　館林土木事務所　　館林市都市建設部都市計画課
館林市政策企画部税務課　　館林市農業委員会事務局

凡　　例

1．本書における挿図の縮尺は、図中に記した。「出土遺物写真」の縮尺は1/3を基本とした。
2．遺跡位置図等は、平成22年度（一部平成25年度）発行の館林市都市計画基本図を用いた。
3．土層断面および出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

参 考 文 献

黒澤照弘　2009「館林市における土師器皿の変遷－15～17世紀を中心にして－」『館林市史研究おはらき』第３号
深澤敦仁　2008「太田地域における古墳時代前期の土器編年試案」『成塚向山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第426集
館林市教育委員会　『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第１集～第57集
館林市史編さん委員会　2010『館林市史　特別編第４巻　館林城と中近世の遺跡』
館林市史編さん委員会　2011『館林市史　資料編１　館林の遺跡と古代史』
館林市史編さん委員会　2015『館林市史　通史編１　館林の原始古代・中世』
館林市史編さん委員会　2018『館林市史　特別編第６巻　館林の町並みと建造物』

目　　次

例　　言
凡　　例
参考文献
目　　次
挿図目次
表 目 次
写真図版目次

第１章　館林市の環境
　１．地理的環境 …… 1
　２．歴史的環境 …… 1

第２章　確認調査の概要
　１．広内町１遺跡（平31地点） …… 3
　２．北小袋遺跡（令元地点） …… 6
　３．大街道遺跡（令元地点） …… 8
　４．間堀１遺跡（令元地点） …… 10
　５．館林城跡・城下町（令元地点） …… 14
　６．大袋Ⅰ遺跡（令元地点） …… 19
　７．天神遺跡（令元地点） …… 20
　８．館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡（令元地点） …… 23

写真図版
報告書抄録

挿 図 表 目 次

第１図　館林市の位置 …… 1
第２図　館林市の地形概念図 …… 2
第３図　平成31年度・令和元年度調査遺跡位置 …… 2
第４図　広内町１遺跡の範囲と調査地 …… 3
第５図　調査区位置と遺構配置 …… 4
第６図　出土遺物 …… 5
第７図　北小袋遺跡の範囲と調査地 …… 6
第８図　出土遺物 …… 6
第９図　調査区位置と遺構配置 …… 7
第10図　大街道遺跡の範囲と調査地 …… 8
第11図　調査区位置と遺構配置 …… 9
第12図　出土遺物 …… 9
第13図　間堀１遺跡の範囲と調査地 …… 10
第14図　調査区位置と遺構配置 …… 12
第15図　出土遺物 …… 13
第16図　館林城跡・城下町の範囲と調査地 …… 14
第17図　調査区位置と遺構配置 …… 15
第18図　住居１平面図 …… 16
第19図　出土遺物 …… 17
第20図　出土遺物 …… 18
第21図　大袋Ⅰ遺跡の範囲と調査地 …… 19
第22図　調査区位置 …… 19
第23図　TP４東面セクション図 …… 19
第24図　天神遺跡の範囲と調査地 …… 20
第25図　調査区位置と遺構配置 …… 21
第26図　出土遺物 …… 22
第27図　館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡の範囲と調査地 …… 23
第28図　調査区位置と遺構配置 …… 24
第29図　出土遺物 …… 25
第30図　秋元家の「藩士住宅図面」【と棟】と調査区遺構配置図 …… 26

第１表　遺物一覧 …… 28

写 真 図 版 目 次

広内町１遺跡（平31地点）
1－1　調査区全景
1－2　土木重機による掘削
1－3　トレンチ５ 深掘部土層断面（東面）
1－4　トレンチ２ 土層断面（北面）
1－5　トレンチ１ 土層断面（南面）
1－6　トレンチ２ 精査後（東から）
1－7　調査完了

北小袋遺跡（令元地点）
2－1　調査区全景
2－2　トレンチ３ 炭焼窯焼土範囲
2－3　トレンチ３ 炭焼窯土層断面（南面）
2－4　トレンチ２ 精査後（北から）
2－5　トレンチ３ 精査後（南から）
2－6　土木重機による埋め戻し
2－7　調査完了

大街道遺跡（令元地点）
3－1　調査区全景
3－2　トレンチ１ 精査前（東から）
3－3　トレンチ２ 土層断面（北面）
3－4　トレンチ１ 精査後（東から）
3－5　トレンチ２ 精査後（西から）
3－6　トレンチ１ 土坑１
3－7　調査完了

間堀１遺跡（令元地点）
4－1　土木重機による掘削
4－2　トレンチ１ 精査前（西から）
4－3　トレンチ２ 深掘部土層断面（南面）
4－4　トレンチ１ 拡張部遺物出土状況
4－5　石核出土状況
4－6　トレンチ２ 精査後（北から）
4－7　調査完了

館林城跡・城下町（令元地点）
5－1　土木重機による掘削
5－2　住居１ 精査前
5－3　トレンチ西面 焼土坑
5－4　トレンチ西面 焼土範囲
5－5　住居１ 範囲確認（北から）
5－6　住居１ 範囲確認（南から）
5－7　住居１ 土層断面（北面）
5－8　住居１ 遺物出土状況
6－9　住居１ 出土遺物
6-10　住居１ 精査後（西から）
6-11　住居１ 精査後（北から）
6-12　トレンチ 精査後（南から）
6-13　トレンチ 精査後（北から）
6-14　土木重機による埋め戻し
6-15　調査完了

大袋Ｉ遺跡（令元地点）
7－1　調査区全景
7－2　TP 精査前
7－3　TP３ 土層断面（東面）
7－4　TP６ 土層断面（東面）
7－5　TP４ 土層断面（東面）
7－6　TP４ 土層断面（東面）
7－7　人力による埋め戻し
7－8　調査完了

天神遺跡（令元地点）
8－1　土木重機による掘削
8－2　トレンチ２ 土層断面（西面）
8－3　トレンチ４ 精査前（東から）
8－4　トレンチ２ 旧２号溝（西面）
8－5　トレンチ１（旧２号溝）遺物出土状況
8－6　トレンチ３ 精査後（西から）
8－7　調査完了

館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡（令元地点）
9－1　調査区全景
9－2　トレンチ１ 精査前（東から）
9－3　トレンチ１ 黒褐色土
9－4　トレンチ１拡張部 建物基礎
9－5　トレンチ１拡張部 精査後（南から）
9－6　トレンチ１東側 焼土
10－7　TP２ 建物基礎
10－8　TP３ 遺物出土状況
10－9　トレンチ１ 精査後（東から）
10-10　トレンチ２ 精査後（東から）
10-11　トレンチ３ 精査後（東から）
10-12　トレンチ１東側 焼土
10-13　調査完了

出土遺物写真

第１章　館林市の環境

１．地理的環境

第１図　館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約８万人の都市である。市域は東西約15.5㎞、南北約8.0㎞と東西に長く、総面積は約60㎢である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50㎞、東京(台東区浅草)へも約65㎞の距離にあり、東京圏との結びつきも強い。

群馬県南東部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、標高15m台(大島町東部)から33m台(高根町)の平坦な低地である。本市の地形を概観すると、「洪積台地」と「沖積低地」に分けることができる。市街地が立地する「洪積台地」が東西に延び、その周辺に「沖積低地」が広がる。

この洪積台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれており、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根町にいたる台地の北側に沿って、日本最古(約６～７万年前)の砂丘の一つである埋積河畔砂丘(館林古砂丘)が走っており、本市最高標高点(33.2m)はこの上にあった。

「沖積低地」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された。台地北側の低地帯には、旧河道や微高地、自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向がみられ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は樹枝状に開析され、沖積低地に延びる多くの谷地を形成している。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地の谷には茂林寺沼・蛇沼・近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

２．歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は147箇所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144箇所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した各時代の遺跡数は、次のとおりである(複合した時代の遺物散布地がみられるため、その中心になると考えられる時代でまとめた)。

旧石器時代は４遺跡(遺物は９遺跡で確認)、縄文時代は10遺跡(縄文土器のみ採取できた遺跡)、弥生時代は２遺跡(遺物は５遺跡で確認)。古墳時代～平安時代(土師器の出土した遺跡)は93遺跡(うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は41遺跡)、古墳は18遺跡(古墳総数25基)、中世以降の生産址１遺跡、中世～近世の城館址は15遺跡、城館以外で中世・近世の遺物が多く出土するのは４遺跡である。

これらの遺跡の分布は地形的な特徴と大きく関わっており、館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりをおおまかに述べると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、山神脇遺跡や水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡など、邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる埋積河畔砂丘上で多く分布している。また、大袋Ⅱ遺跡や間堀１遺跡など低地を望む台地の突端の遺跡でも当該期と考えられる資料が確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増加し洪積台地上に遺跡が分布する。前期や中期の遺跡は、加法師遺跡や間堀１遺跡など、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に集落を形成している。確認できる遺跡数は後期以降減少するが、洪水堆積層の下で確認できることが多く、より低地で痕跡が残される傾向がある。

《弥生時代》

弥生時代の遺構は確認されていないが、大袋Ⅰ遺跡や小林遺跡など微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。道満遺跡は洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在しており、この傾向は弥生時代の遺物散布に似ている。中期には遺跡の数が増えるとともに、その所在は台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には遺跡数は増大し、北近藤第一地点遺跡や当郷遺跡など台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、推定地も含め33基が残存している(『館林市史　資料編１』参照)。古墳群が２箇所あり、

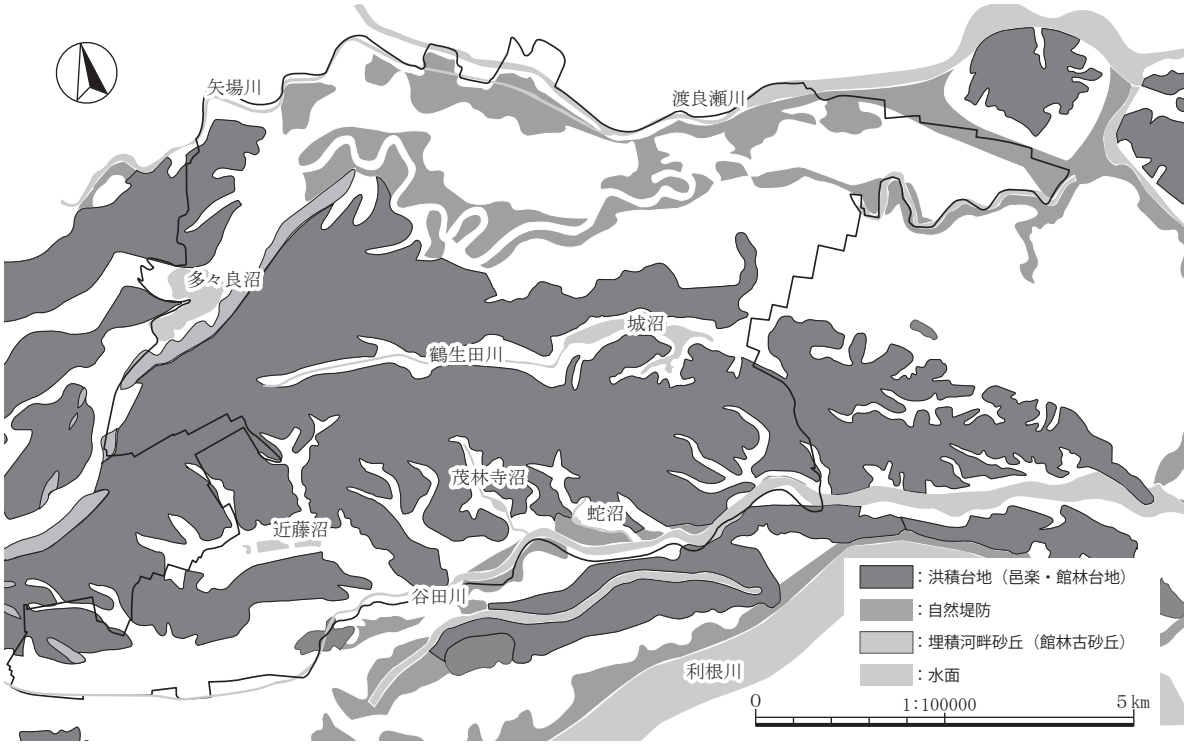
一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする埋積河畔砂丘上にある。そのほかに単独のものも多いが、そのいずれも谷や谷地等を見おろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

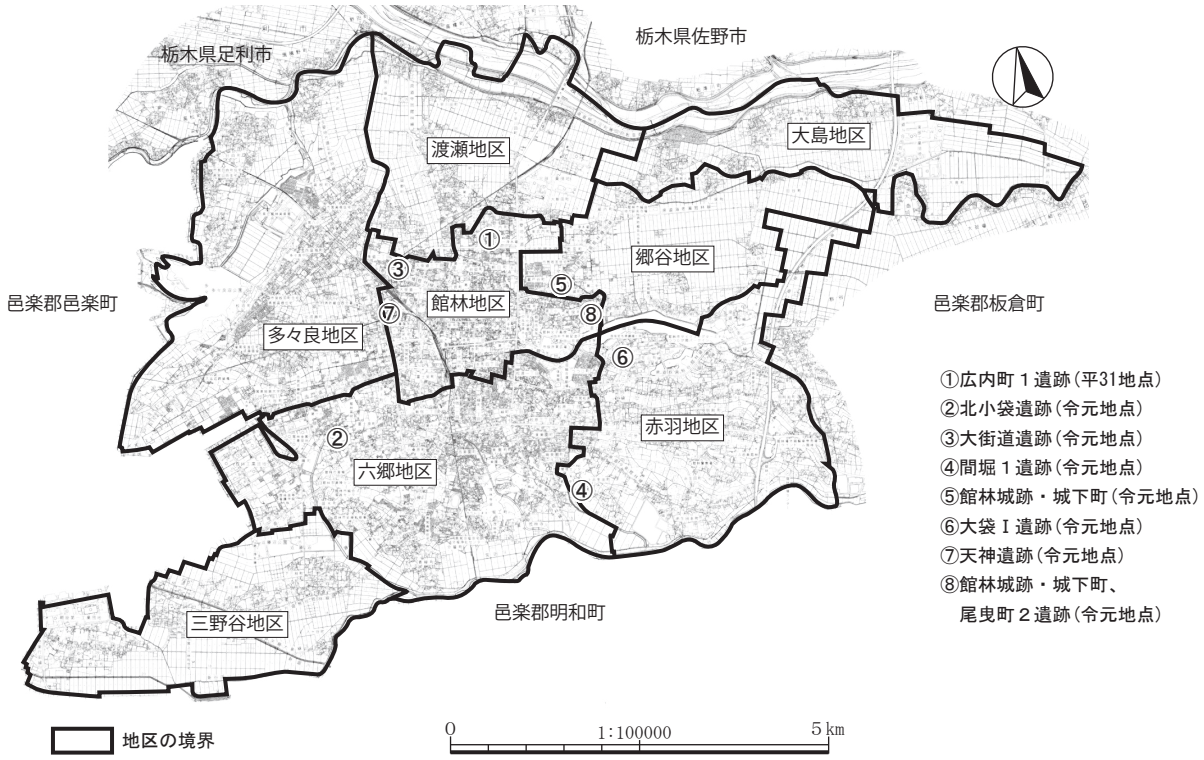
この時代の遺跡の痕跡は多く残る。台地の端部に限定されず遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれていたと考えられる。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝承的な要素が多く実態は判然としない。しかし、谷や小河川などの自然地形を利用し中世末には館林城が、近世には館林城を中心として城下町が形成され、その町割りは今も残っている。



第２図　館林市の地形概念図

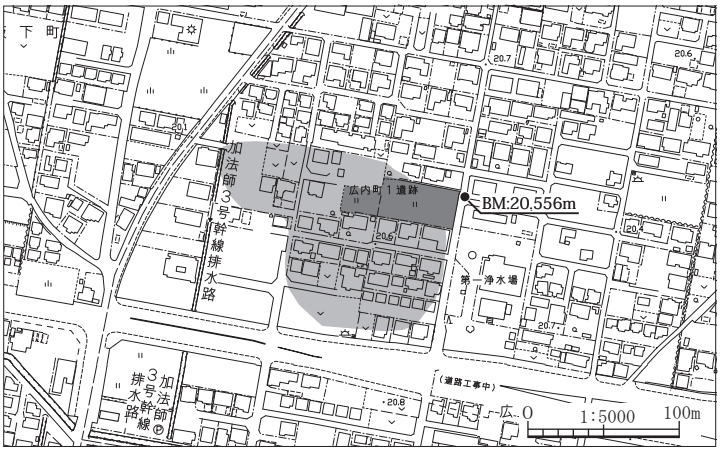


第３図　平成31年度・令和元年度調査遺跡位置

第２章　確認調査の概要

１．広内町１遺跡（平31地点）

遺跡番号　0035
時代種別　平安（散布地）
調 査 地　館林市広内町1277番１、
　　1277番３
調査原因　宅地造成
調査期間　平成31年４月16日～４月23日
　　〔内６日間〕
調査面積　約238㎡



第４図　広内町１遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「広内町１遺跡」は、館林市街地北にある平安時代の遺物の散布地である。旧矢場川の影響を受けた自然堤防上に位置しており、周辺は古くから住宅地として利用されている。

本遺跡ではこれまでに調査は実施されていない。

今回届出のあった土地は遺跡の北東端付近に位置し、自然堤防上でも比較的標高の高い地点であり、基準点の標高は20.556mである。地権者の話によると、近年は陸田として利用されていたが、その前は桑畑として使われていた。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に５本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。使用した基準点は20.556mであり、機械高は22.000mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。

Ⅰ層は表土（層厚約40㎝）である。水田耕作土が約30㎝あり、下部は耕盤層（５㎝）とさらに下層に斑鉄を含む層（５㎝）を伴う。Ⅱ層はにぶい黄褐色土層（10YR5/4）であり、２Ａ層は粘性なし、締まりありで、調査区全体に堆積している。粒子は細かく雲母片も含むことから河川堆積物を含む可能性がある。遺物の出土も主にこの層になる。２Ｂ層はＴ３～Ｔ５で確認され、粘性がややある。また、Ｔ３・Ｔ５では灰黄褐色土層（10YR5/2）が確認され（２Ｂ′層）、鉱物を含み、褐灰色（7.5YR5/1）の粒状堆積がある。Ｔ１の攪乱はⅡ層を掘り込んでおり、覆土中より一銭硬貨（大正９年）が出土したことから、Ⅱ層は大正９年以前の堆積と考えられる。

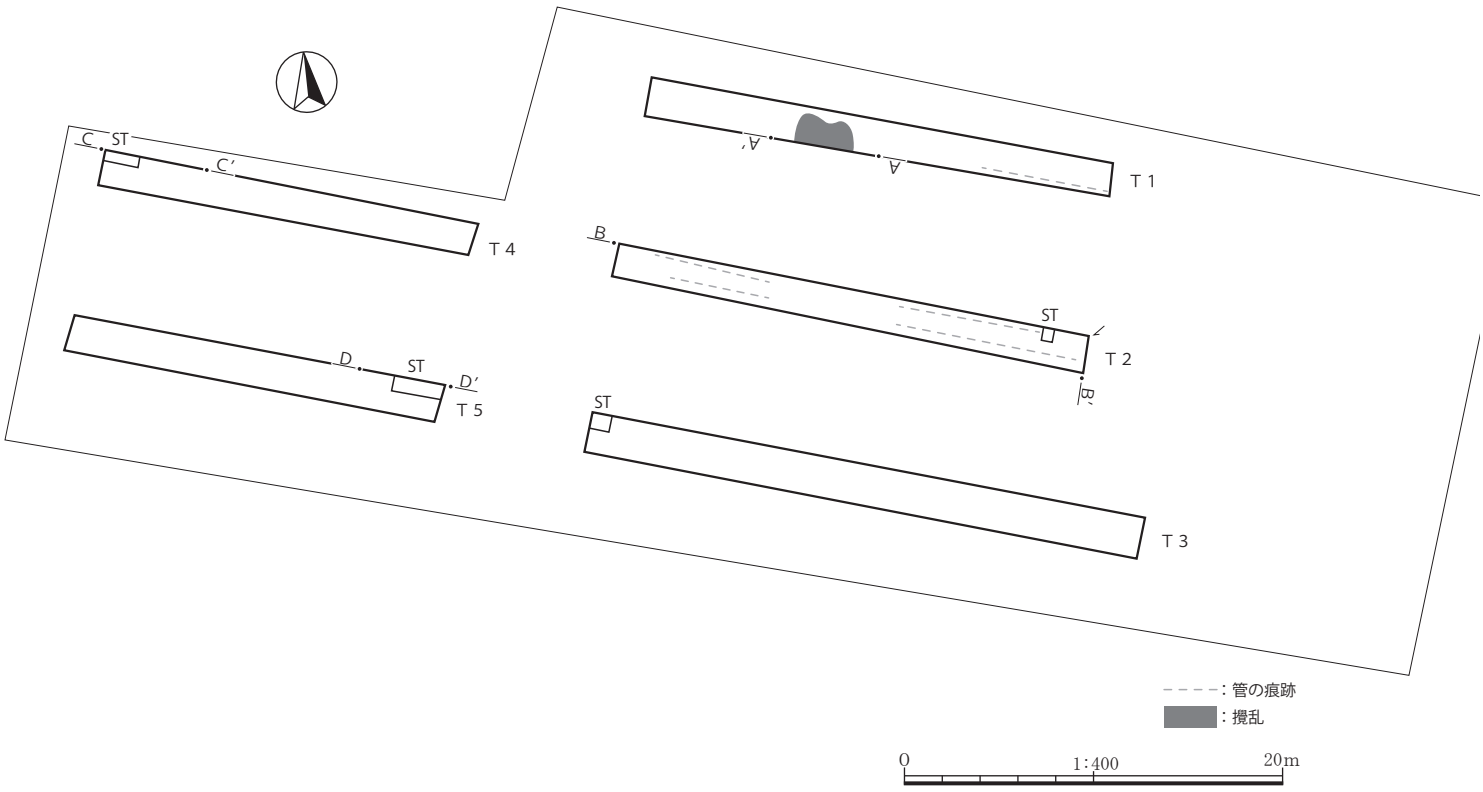
Ⅲ層は粘質の層（にぶい黄褐色土層10YR4/3、灰黄褐色土層10YR4/2）であり、下層は砂の含有量も多く（砂質粘土）、湿性である。当初いわゆる上部ローム層に対応するものと想定したが、澤口 宏 氏からその可能性は低い旨の知見（後述）を得た。

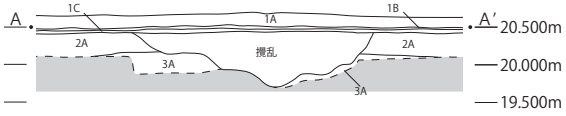
（４）確認された遺構

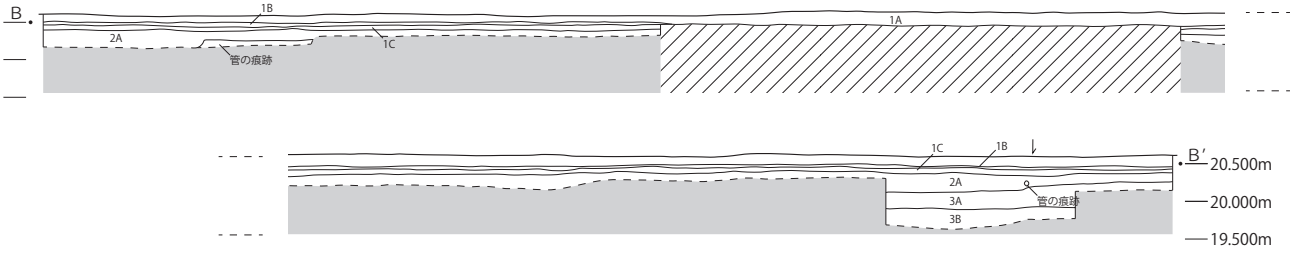
遺構は確認されなかったが、管の痕跡が３条（関連する穴２箇所）確認された。出土遺物はなくその詳細は不明である。２Ａ層で確認され、φ５㎝程度の正円形をしており、対応する痕跡はほぼ同一標高でほとんど勾配が取られていない。残留物もなく定かではないが節などの痕跡などがないことから人工物が埋設されていた可能性が高い。しかし、被覆する堆積物に撤去した痕跡もないことから、時期・内容ともに不明である。

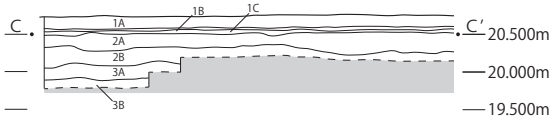
（５）出土遺物

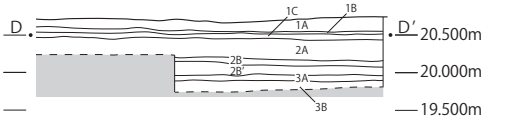
確認された遺物は、近世～近代の陶磁器片を中心に100点程度である。Ｔ１の攪乱部からの出土が大部分を占める。攪乱部からは近世～近代の陶磁器以外に、ガラス製の小瓶（薬品入れ）、ガイシ、焙烙・カワラケなども出土した。覆土中から大正９・11年の１銭硬貨が計３枚出土している。須恵器甕の破片も１点出土している。本遺跡から西に500mには、古墳時代の住居址が多く確認された八方遺跡もあるが、当該期の痕跡は希薄である。











I
- 1A　表土、水田耕作土
- 1B　明褐色 5YR5/6　硬く締まる　ほぼ水平に堆積　水田に伴う耕盤層
- 1C　明褐色 5YR5/6　硬く締まる　斑鉄を含む　水田に伴う耕盤層

II
- 2A　にぶい黄褐色 10YR5/4　粘性なし、締まりあり　粒子細かく雲母片を含む（河川堆積物を含む可能性）　調査全体にあり
- 2B　にぶい黄褐色 10YR4/3　粘性ややあり、締まりあり　粒子細かい
- 2B′　灰黄褐色 10YR5/2　粘性・締まりあり　灰褐色 7.5YR5/1の粒状斑鉄をを含む（T5とT3西端深掘部で確認）

III
- 3A　にぶい黄褐色 10YR/4/3　粘性・締まりあり
- 3B　灰黄褐色 10YR4/2　粘性・締まりあり　やや湿性　砂混じり　粒子細かい

0　1:100　5m

第５図　調査区位置と遺構配置

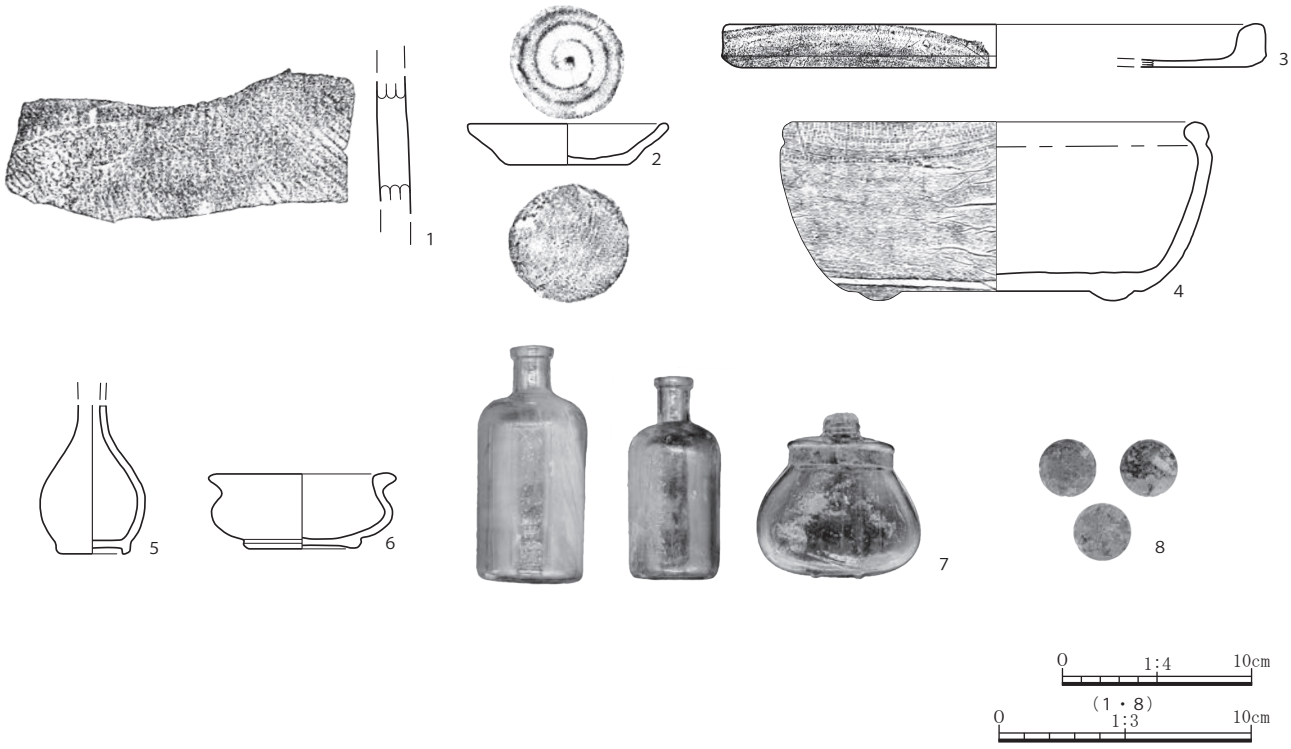
（6）まとめ

広内町１遺跡で行われた初めての調査であったが、本地点では遺物・遺構はほとんど確認できなかった。しかし、砂混じりのローム質層が堆積しており、二次堆積であったとしても、（上層とあわせ）城下町などが展開する洪積台地より低い場所に微地形のような形でロームが堆積する環境であった可能性もある。今回の調査区で砂質のローム質層が確認されたのはＴ２～Ｔ５であり、標高は19.900m以下であった。広内町１遺跡は、旧矢場川の影響を受けた自然堤防上に立地するという認識であったが、微地形が形成されており、そもそも旧矢場川が流れ込む素地があった可能性も想定され、その形成環境・時期も含めて今後の検討課題である。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

（7）その他

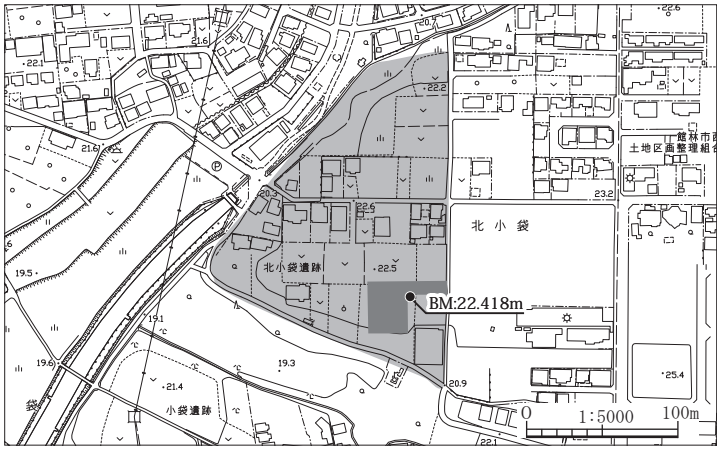
今回の調査でⅢ層とした堆積は、ローム層である可能性があったことから、周辺の堆積状況に注視していた。調査区東側で下水道工事があり、７月２日の午前中に堆積状況を実見させてもらったが、その際、調査対象地内でも本管に繋げる工事を行うために1.8m程度掘削するということがわかり、現場担当者と調整をした上で、澤口氏に連絡を取り、８日に実見した。その結果、明確なテフラが確認できないことから、As-b 以降～矢場川が締切られるまでの期間（1108年～1665年ごろ）の堆積と考えられるとの知見を得た。しかし、形成要因や環境は不明であり、旧矢場川流路との関係も含めて今後も検討していく必要があることを確認した。



第６図　出土遺物

２．北小袋遺跡（令元地点）

遺跡番号　0054
時代種別　旧石器・縄文（散布地）
調 査 地　館林市近藤町字北小袋171-53、171-54、171-55
調査原因　その他開発（太陽光発電）
調査期間　令和元年７月26日～８月１日〔内６日間〕
調査面積　約93㎡



第７図　北小袋遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「北小袋遺跡」は、館林市の南西、近藤沼の北に位置する旧石器・縄文時代の遺物の散布地である。近藤沼から延びる大きな谷が樹支状の支谷に分かれる舌状台地上に位置し、周辺は畑や住宅地として利用されている。

本遺跡ではこれまでに７地点（Ａ・Ｂ、平18・20・28Ａ・28Ｂ・29地点）で調査が行われている。特に昭和61年度の調査では、旧石器時代の石器と縄文時代早期・前期の土器片が出土している。

今回届出のあった土地は遺跡の東端付近に位置し、平29地点の隣接地であり、基準点の標高は22.418m（22.702mを移動）である。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に３本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。Ｔ３設定時に焼土が確認されたため、東西方向に一部拡張した。使用した基準点は22.418mであり、機械高は24.000mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅱ層である。

Ⅰ層は表土（層厚約50㎝）である。従前は雑木林が広がっており、その伐採・伐根の影響を受けている。Ⅱ層はローム層（褐色10YR4/6）であり、粘性・締まりともにある。表土直下にローム層が堆積する状況は平29地点と同様である。深掘部が限定的なこともあり、明確な暗色帯は確認できていない。

（４）確認された遺構

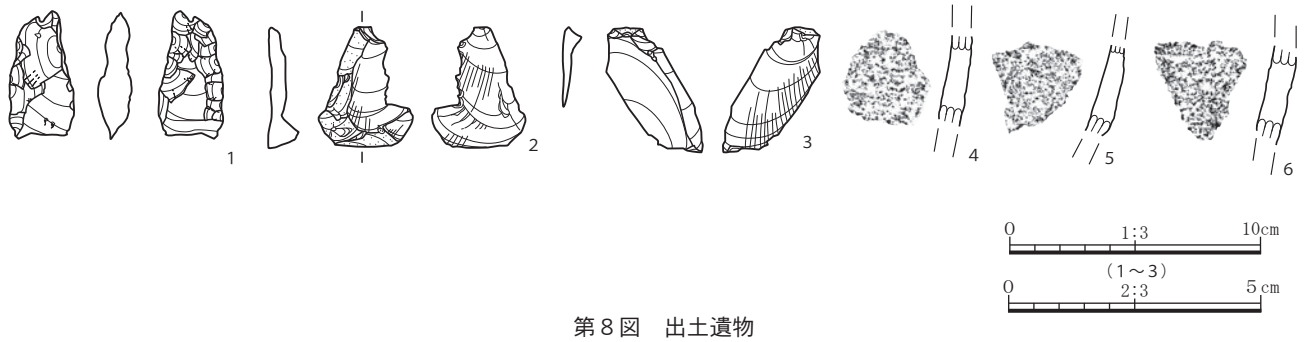
炭焼き窯１基、土坑６基が確認された。いずれも出土遺物はなくその時期は判然としない。

炭焼き窯は炭化材の残存状況から近世以降のものと考えられる。斜面地を利用した半地下式の東西に延びる炭窯で、炊出部はさらに南側に延びていると想定される。煙出部に配石などはなく定かではないが煙道は２ｍほど北方向に延びている。焼土が形成されており（赤褐色2.5YR4/8）平面でも確認できる。５㎝程度の炭化材が多く残る層だけでなく、ススのように粒子が細かい黒色土の堆積もある。

（５）出土遺物

確認された遺物は、剥片を中心に30点程度である。

石器は黒曜石の剥片や石鏃未成品、チャート製の剥片が出土している。ローム層中からも出土するが、石鏃未



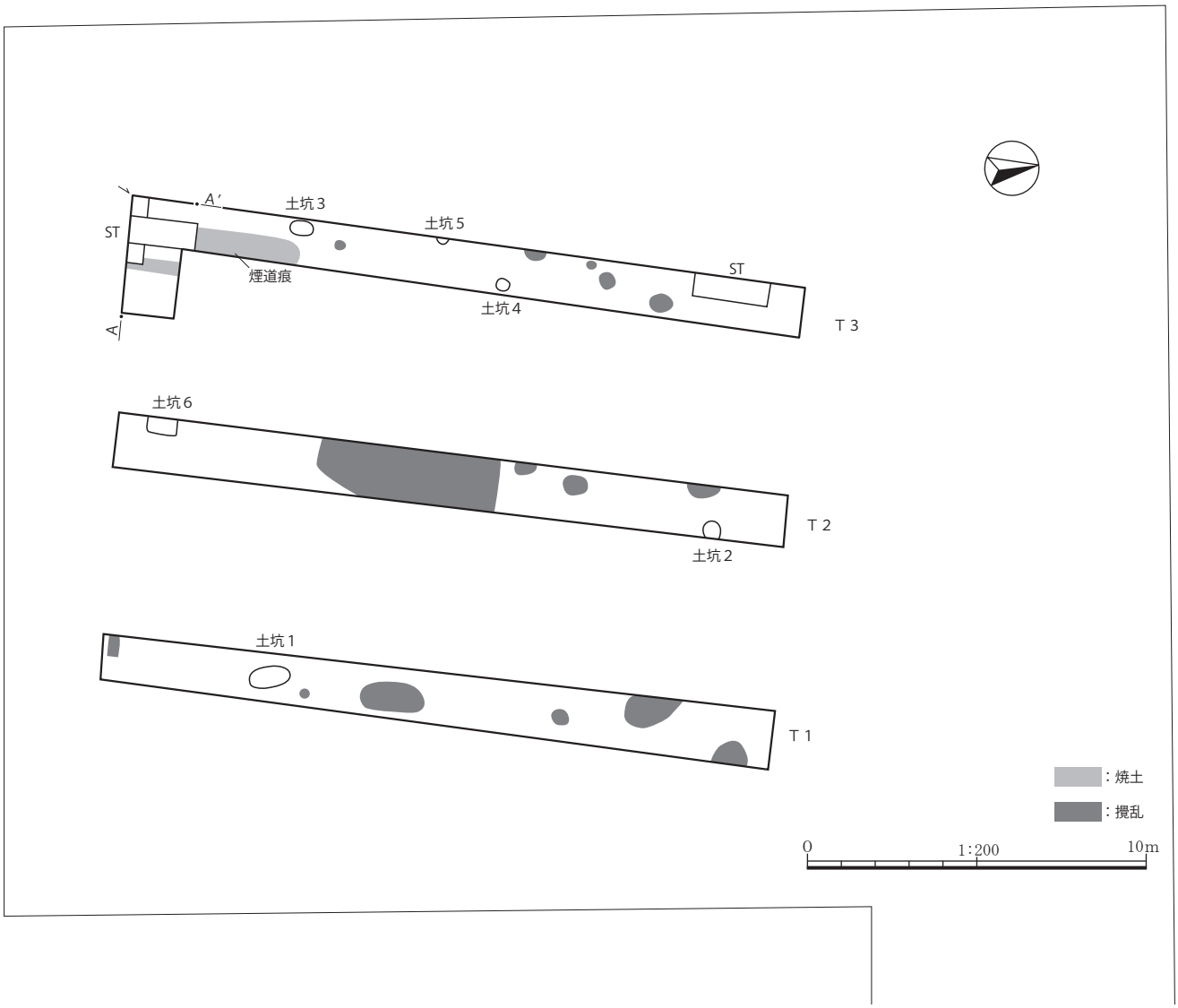
第８図　出土遺物

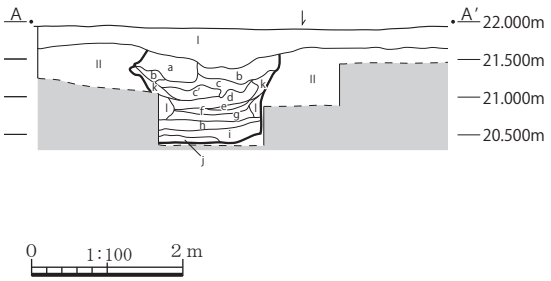
成品も出土することから時代は判然としない。縄文土器片は、表採や木の攪乱土中からの出土が主である。

(6)まとめ

本地点は雑木による攪乱も多く、縄文時代以降の包含層は確認できなかった。遺物・遺構はほとんど確認できなかったが、近隣住民の聞き取りで雑木林の中で大量の遺物を拾ったという話や昭和61年度の調査時に遺物が出土した地点がさらに西側の崖線部付近になることから、西側に広がる雑木林内では調査を行う必要がある。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。





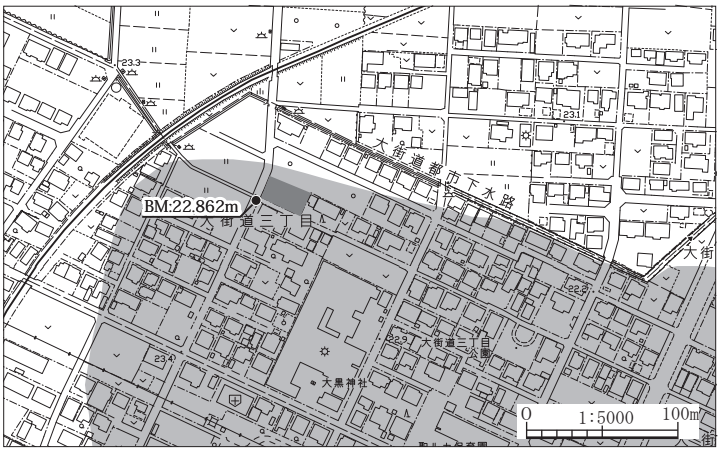
I 雑木林　根攪乱多い
II 褐色 10YR4/6　粘性・締まりあり　ローム層

a にぶい黄褐色 10YR4/3　粘性あり、締まりなし
b にぶい黄褐色 10YR5/4　粘性・締まりあり
c 暗褐色 10YR3/3　粘性あり、締まりなし　粒子細かい　┐天井部
c′ 黒 10YR2/1　粘性あり、締まりなし　c層より粒子細かい　┘
d 黒 7.5YR1.7/1　粘性・締まりなし　明赤褐色 5YR5/6の焼土粒を5%含む
e 黒 7.5YR2/1　粘性なし、締まりややあり
f 褐色 10YR3/2　粘性なし、締まりあるが崩れる　50mm程度の焼土粒が混じる
g 褐色 10YR3/2　粘性なし、締まりあるがぼろぼろと崩れる
h 黒 10YR1.7/1　粘性なし、締まりあり　粒子が非常に細かい
i 明褐色 7.5YR5/6　粘性なし、締まりややあり　焼土や炭が混じる　ざらつく　ぼろぼろ崩れる
j 黒 10YR1.7/1　h層に近いか　木炭が大きく、形が残っている
k 赤褐色 2.5YR4/8　粘性なし、締まりあり　焼土　崩れる
l 明赤褐色 5YR3/6　黒褐色 7.5YR3/2が混ざる　焼土　崩れる

第9図　調査区位置と遺構配置

３．大街道遺跡（令元地点）

遺跡番号　0031
時代種別　縄文・平安（散布地）
調 査 地　館林市大街道三丁目970－４、972－５
調査原因　個人住宅
調査期間　令和元年11月８日～11月15日〔内４日間〕
調査面積　約46㎡



第10図　大街道遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「大街道遺跡」は、館林市の中心市街地の西に位置する縄文・平安時代の遺物の散布地である。北と西は細い支谷に囲まれる渡良瀬川の洪積低地に位置し、近世から主要街路沿いの地域として宅地化が進んでいる。

本遺跡ではこれまでに３地点（平成17・20・25年度）で調査が行われている。なお、昭和32年度に周辺の土地改良に伴う土木工事の際に行われた表採調査では、縄文時代後期の深鉢１点と石斧２点が確認されている。

今回届出のあった土地は遺跡の北西端付近に位置する平25地点の隣接地であり、基準点の標高は22.862m（23.487mを移動）である。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に２本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。使用した基準点は22.862mであり、機械高は24.000mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。

Ⅰ層は表土（層厚約30㎝）である。従前は造園業社の植栽や庭石の置き場であった。１Ａは黒褐色土（10YR2/2）であり、小礫や、焼土、ビニールなども混ざる。近隣住民の話によると、調査地北の用水路の護岸工事の際の残土が広げられているとのこと。Ⅱ層は漸移層（にぶい黄褐色10YR4/3）であり、粘性なし、締まりあり。上層の１Ｂ層は締まり現代の攪乱を伴う。Ⅲ層はローム層（にぶい黄褐色10YR5/4）であり、粘性あり、締まり強い。Ｔ２では表土下90㎝で湧水（標高22.000m）。

（４）確認された遺構

土坑１基が確認された。上部から近世陶磁器片が出土したが、土坑内のトレンチ壁際（黒褐色土10YR3/2）から称名寺式土器が出土することから縄文時代後期と考えられる。直径70㎝のすり鉢状で、ロームから38㎝程度掘り込む。底部で湧水（21.853m）。

（５）出土遺物

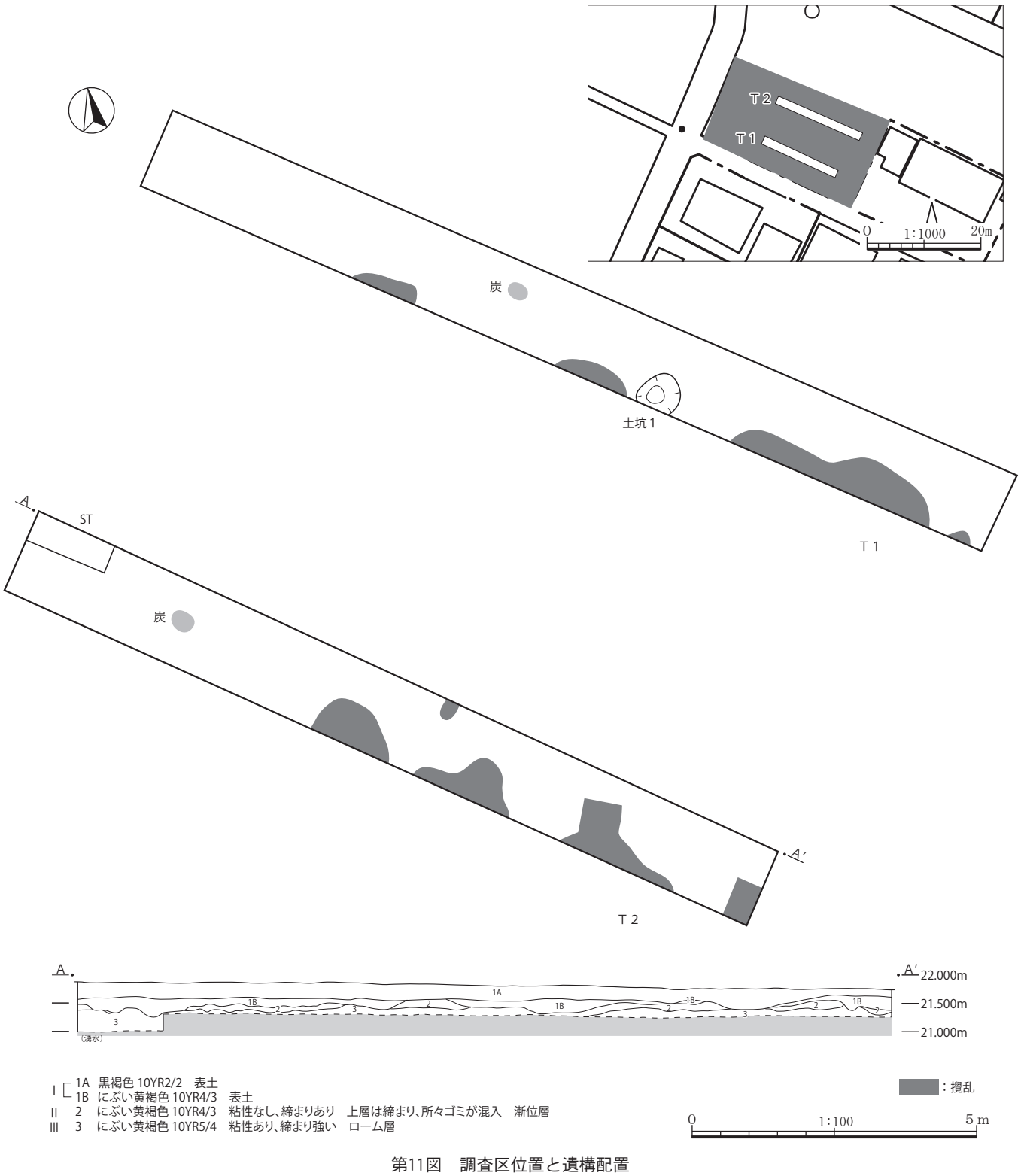
確認された遺物は、陶磁器片を中心に20点程度である。

近世陶磁器の小破片が中心であり、近代陶磁器も混ざる。植栽の影響かそのほとんどが攪乱からの出土であった。称名寺式土器片が出土する点は平25地点と同様である。

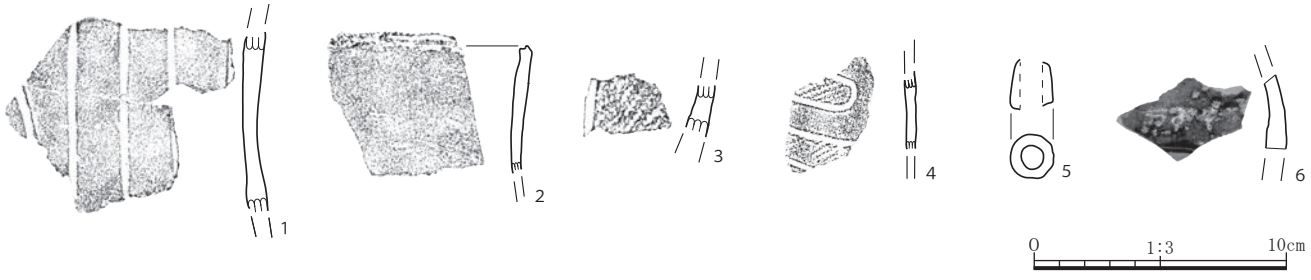
（６）まとめ

本地点は平25地点の隣接であり、縄文時代後期の遺物・遺構の出土が期待されたが、植栽などによる攪乱も多く遺物包含層は確認できなかった。近隣住民の聞き取りで、この場所だけはローム層の残りがよく（日照りになる）、東西隣接地は低いとの話であり、実際平25地点より高い標高でロームが確認され、縄文時代後期の痕跡は希薄であった。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。



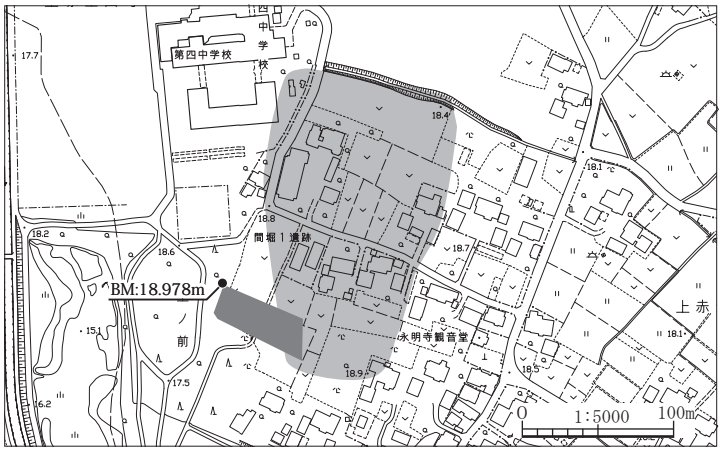
第11図　調査区位置と遺構配置



第12図　出土遺物

４．間堀１遺跡（令元地点）

遺跡番号　0116
時代種別　旧石器・縄文・古墳（集落跡）
調 査 地　館林市上赤生田町上ノ前
　　3465－５
調査原因　その他開発（太陽光発電）
調査期間　令和元年５月10日～５月23日
　　〔内８日間〕
調査面積　約166㎡



第13図　間堀１遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「間堀１遺跡」は、館林市の南部に位置する縄文時代を主とした集落跡である。邑楽・館林台地の南辺で、蛇沼の谷を望む舌状台地上に広がっており、周辺は大規模指定既存集落の区域指定（昭和62年）を受けているが、農地も多く残されている。

本遺跡ではこれまでに７度の調査が行われている。特に昭和57年度に行われた調査では縄文時代住居址と遺物が多量に出土している。

今回届出のあった土地は遺跡の南西端付近に位置し、崖線部から上がり平らな台地が広がる地点であり、基準点の標高は18.978mである。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に１本、南北方向に５本（計６本）のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。一部ローム層中から石器の出土があったため、木製のとおし（4.5㎜メッシュ）を使用し、精査時の排土（上部ローム層）をふるいにかけるとともに、一部拡張した。使用した基準点は18.978mであり、機械高は20.500mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅴ層である。

Ⅰ層は表土（層厚約10㎝～１m）である。耕作土が約10㎝程度（Ｔ１）であり、Ｔ１西部・Ｔ３～６で１m程度砕石を伴う盛土がされている。Ⅱ層は暗褐色土層（10YR3/3）であり、粘性ややあり、締まりなし、Ｔ１・Ｔ３の盛土下で確認。遺物出土なし。成因不明。Ⅲ層は上部ローム層（にぶい黄褐色土層10YR4/3）であり、粘性あり、締まりややあり。Ⅳ層は暗色帯（黒褐色土層10YR3/2）粘性あり、締まりややあり。鉱物ありざらつく。Ⅴ層は中部ローム層（５Ａ：褐色土層10YR4/4、５Ａ′：黄褐色土層10YR5/6）であり、粘性強い、締まりあり。やや湿性。５Ａの下部に鉱物がありざらつく。

（４）確認された遺構

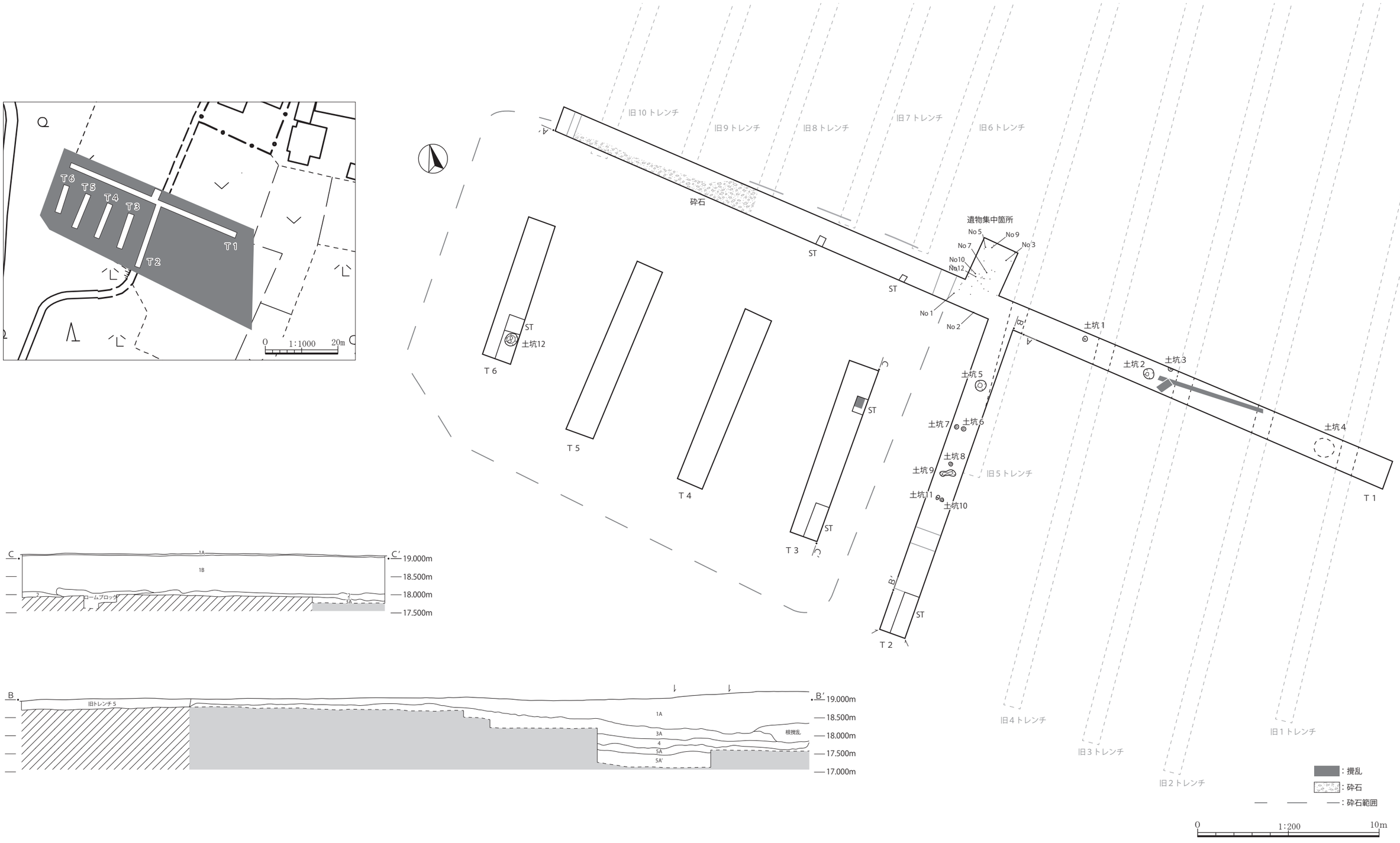
土坑12基が確認された。出土遺物はなくその時期は判然としない。

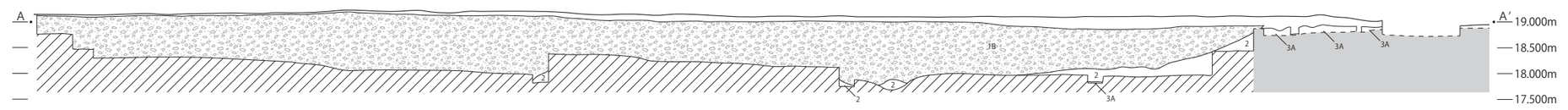
土坑２・５は近年のものと考えられる。土坑６・７・10・11は形態と掘り込みが20㎝程度で同質であるが関連は不明である。土坑12は深掘部で確認され、暗色帯以下を掘込んでいるが、上部の堆積を確認できなかった。しかし、輪郭が明確であり（暗褐色土10YR3/3）古い印象を受けない。

（５）出土遺物

確認された遺物は、縄文時代中期の土器片を中心に200点程度である。調査区の大部分が土地の改変の影響を受けており、ほとんどの遺物が影響の少ないＴ１・Ｔ２からの出土である。

縄文土器は阿玉台式土器や加曽利Ｅ式土器が多いが、勝坂式土器も確認できる。石器は、チャート製の石核や剥片、黒曜石製のチップなどがローム層中から出土したが、地表面から20㎝程度であり、同一レベルから石鏃も出土している。第15図－１はチャート製の石核で、原礫面が一回り残っており、直接打撃による多方面から剥離を行っている。上端部に連続する小さな剥離痕が認められる。２はチャート製の平基無茎石鏃で、先端部が欠損している。





I 1A 耕作土
1B 盛土 碎石、ビニールゴミ等含む
II 2 暗褐色 10YR3/3 粘性ややあり、締まりなし 遺物の出土なし 成因不明
III 3A にぶい黄褐色 10YR4/3 粘性あり、締まりややあり 上部ローム層
3A′ 暗褐色 10YR3/4 粘性・締まりあり 上部ローム層

IV 4 黒褐色 10YR3/2 粘性あり、締まりややあり やや湿性 鉱物ありざらつく 暗色帯
V 5A 褐色 10YR4/4 粘性、締まりあり やや湿性 下部で鉱物ありざらつく
5A′ 黄褐色 10YR5/6 粘性強い、締まりあり やや湿性

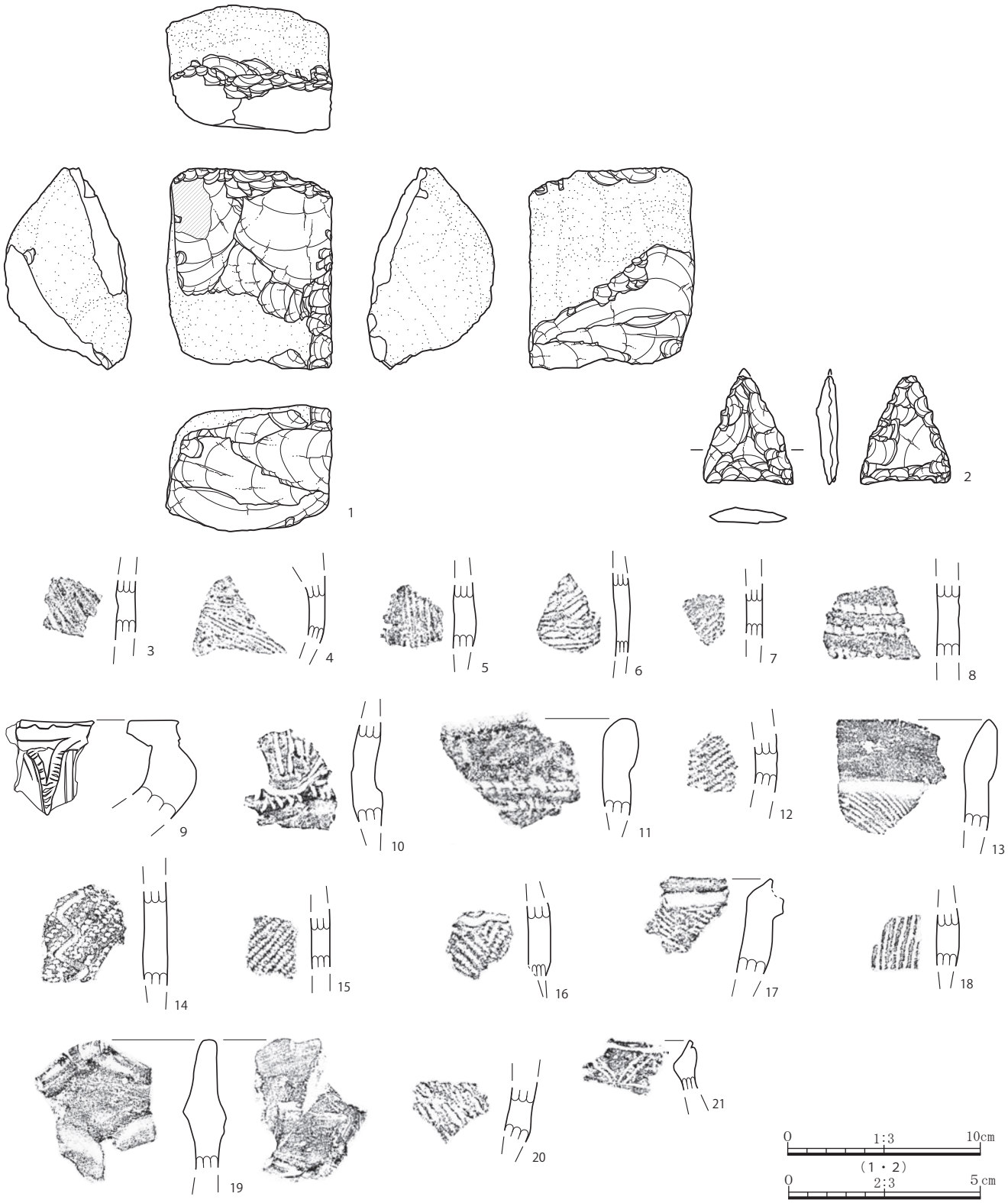
0 1:100 5m

第14図 調査区位置と遺構配置

（6）まとめ

間堀１遺跡で平成21年度に実施された調査の隣接地での調査であったが、本地点は大部分が土地の改変の影響を受けており、遺物・遺構はほとんど確認できなかった。しかし、①平21地点のトレンチ位置②切土・盛土範囲③表土直下のローム層中から土器と石器が出土する状況が確認できた。近隣住民への聞き取りによると、昭和30年頃切土・盛土を行い、その後は陸田をやっていたという。昭和57地点のⅡ区からは縦長の二次加工剥片（頁岩製）が出土しており、後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の資料であることが想定されており、今後も出土状況に注意し、表土層直下から調査を行う必要がある。

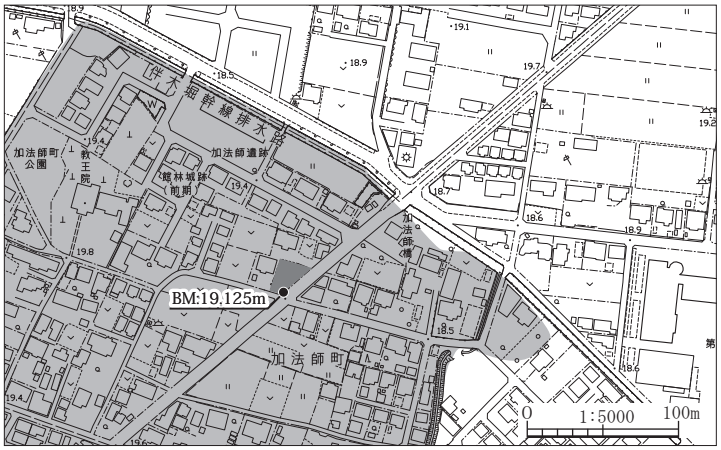
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第15図　出土遺物

５．館林城跡・城下町（令元地点）

遺跡番号　0033
時代種別　縄文・平安・中世・近世
（城館跡・散布地）
調 査 地　館林市加法師町2849－１
調査原因　個人住宅
調査期間　令和元年11月29日～12月７日
〔内６日間〕
調査面積　約30㎡



第16図　館林城跡・城下町の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「館林城跡・城下町」は、館林市のほぼ中央部に位置する近世を主とした城館跡である。牙城部は城沼に突出する舌状台地上に位置し、周辺地形を利用し堀を配した総郭となる。榊原康政をはじめとする７家17代の居城およびその城下町として栄えたが、城および城下町が存した位置と現在の市街地が近似しているため、これまでの開発により城郭としての遺構の多くは失われている。城自体の遺構としては本丸・三の丸に一部土塁が残存しているのみである。

本遺跡ではこれまでに土橋門の復元や本丸、土塁に係る調査が13地点で行われている。特に平成27年度の土塁推定範囲内で行われた調査では、土塁の構築年代を類推するうえで参考となる資料がまとまって出土した。

今回届出のあった土地は遺跡の北端付近に位置し、崖線部に続く平らな台地が広がる地点であり、基準点の標高は19.125m（18.90mの三角点を移動）である。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、南北方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。途中、住居址のプランを確認するためにトレンチ東部分を一部拡張した。使用した基準点は19.125mであり、機械高は20.500mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。

Ⅰ層は表土（層厚約30㎝）である。従前は耕作されており、農機具小屋が建っていた。またそれ以前は住宅が建っており、建物基礎の痕跡が認められた。下層との境は填圧がかけられ硬化している。Ⅱ層は黒褐色土層（10YR3/2）であり、粘性あり、締まりなし。ローム粒（にぶい黄褐色10YR4/3）を１％程度含む。遺物の多くはこの層の出土である。Ⅲ層はローム質層（暗褐色10YR3/3）であり、粘性あり、締まりややあり。湿性で、斑鉄やヨシ等の遺存体がある。下部にいくにつれてシルト質。地表下70㎝で湧水（標高18.600m）。

（４）確認された遺構

古墳時代住居址１軒と焼成土坑１基が確認された。住居址１は古墳時代前期の住居址と考えられるが、遺物が少ない。また覆土の上部ではあるが、中世のカワラケが数点出土しており、住居の重複や、平27地点のような出土状況等も考えられるが、覆土もⅡ層と同様に黒褐色土（10YR3/2）であり、遺構の検出ができなかった。堆積土はいずれも湿性であり、特に地山のｆ層（ローム質：灰黄褐色10YR4/2）は、締まり・粘性ともにあるが砂質である。

焼成土坑は、３㎝程度の厚さで焼土化しており、ある程度の火力が想定されるが、Ⅱ層を掘り込みシルト質のブロックを含んでいることから新しいものと考えられる。

（５）出土遺物

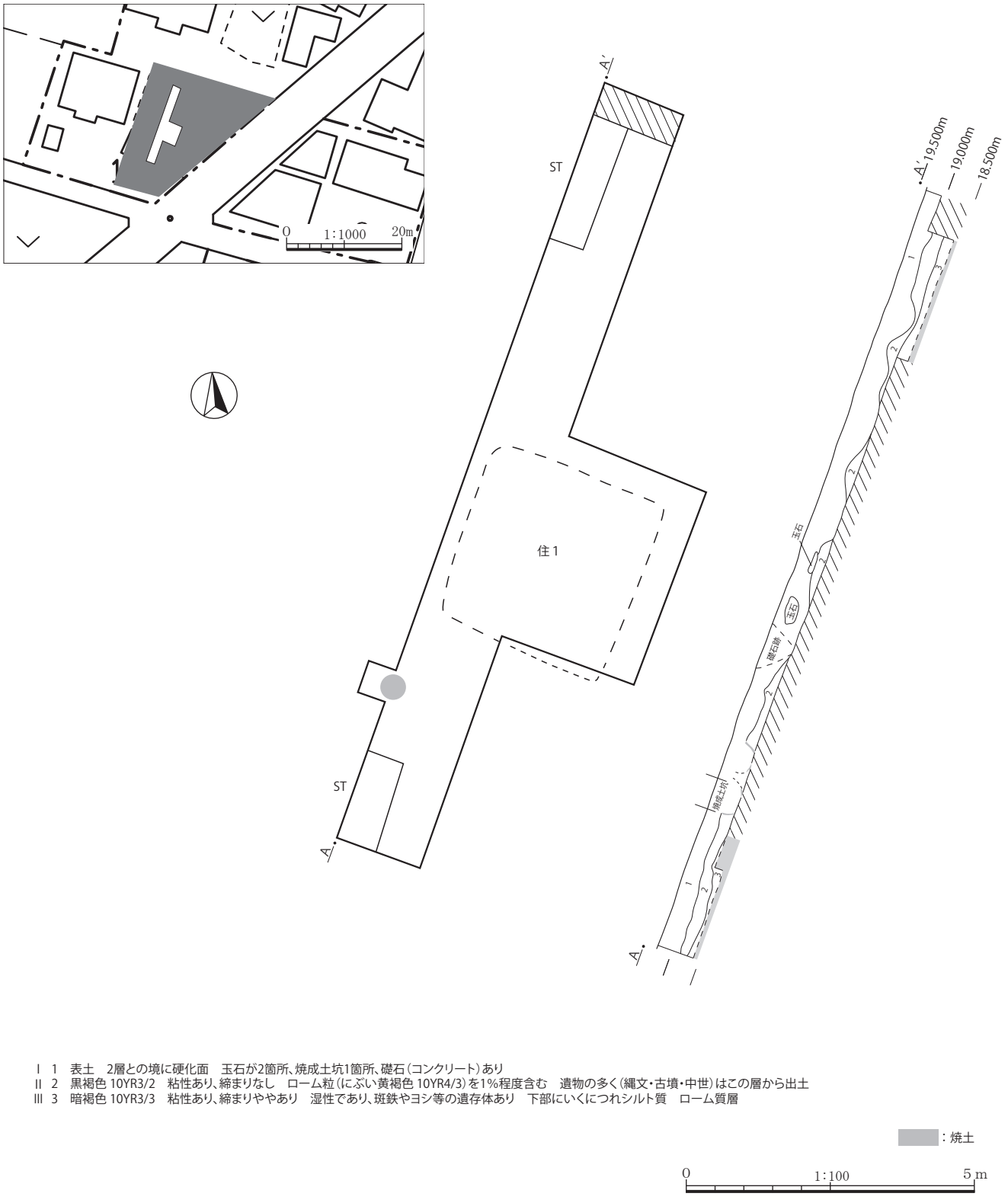
確認された遺物は、土師器や縄文土器を中心に120点程度である。

古墳時代前期の複合口縁壺の口縁部片や縄文土器片が主である。また、住居址の覆土中から、中世のカワラケが多数出土している。

第19図－３・４は加曽利ＥⅡ式相当の連弧文系の土器片と推察されるが大きく外反している。表採資料であるが、分銅形打製石斧も確認できた。22・25・29などは複合口縁を持つ壺で、古墳時代前期の特色を示す。ほかにも坩や手捏ね土器、羽口も出土している。

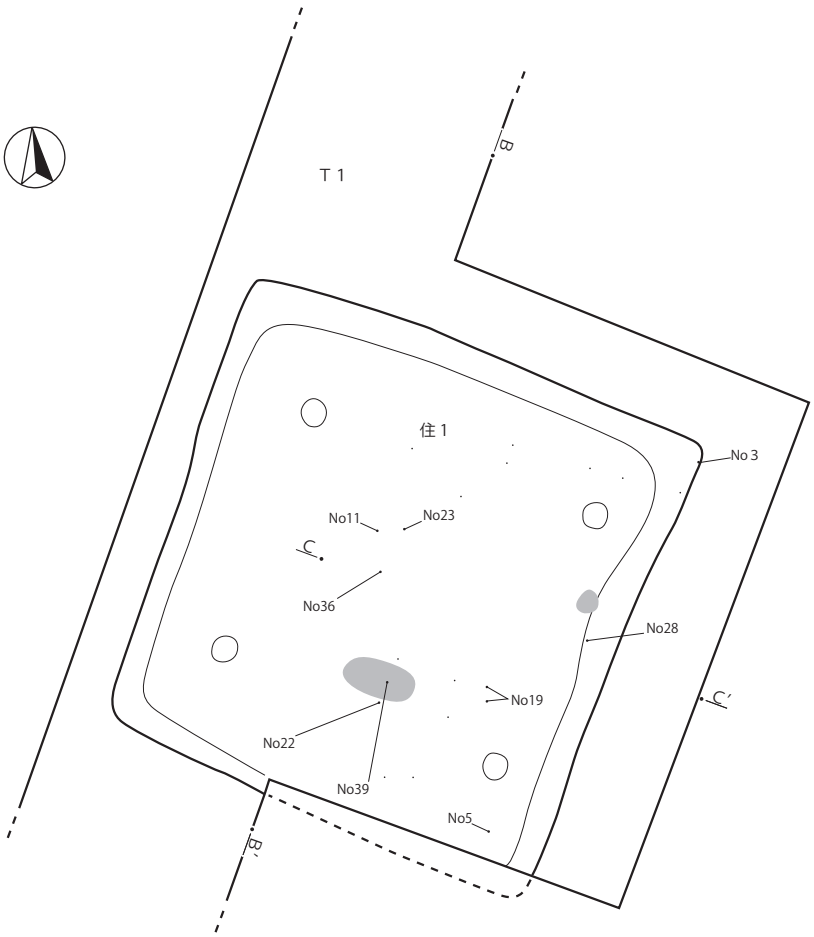
第20図－33～39は回転糸切りと板目による圧痕を底部に残し、内面底部には指頭による圧痕を残す。33は内部

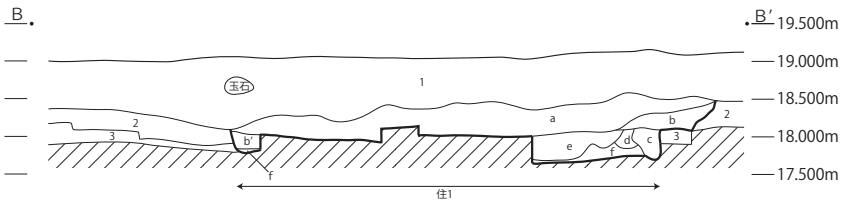
に強い圧痕を残し、34は口縁部径と底部径が小さく直線的に立ち上がるが器高は低い。黒澤編年（黒澤2009）のに照らすと、Ⅱ期－１とⅡ期－２の特徴を混在しているが、いずれにせよ中世のものと考えられる。近くの平27地点ではカワラケがまとまって出土しており、それら廃棄行為との関連も考察していく必要がある。また、銘や鑿痕は確認できなかったが、緑泥片岩の破片も出土した。

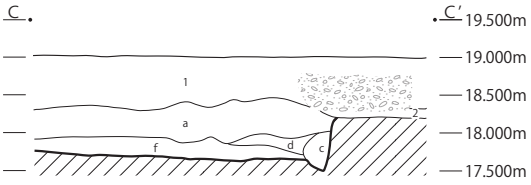


Ⅰ 1　表土　2層との境に硬化面　玉石が2箇所、焼成土坑1箇所、礎石（コンクリート）あり
Ⅱ 2　黒褐色 10YR3/2　粘性あり、締まりなし　ローム粒（にぶい黄褐色 10YR4/3）を1%程度含む　遺物の多く（縄文・古墳・中世）はこの層から出土
Ⅲ 3　暗褐色 10YR3/3　粘性あり、締まりややあり　湿性であり、斑鉄やヨシ等の遺存体あり　下部にいくにつれシルト質　ローム質層

第17図　調査区位置と遺構配置







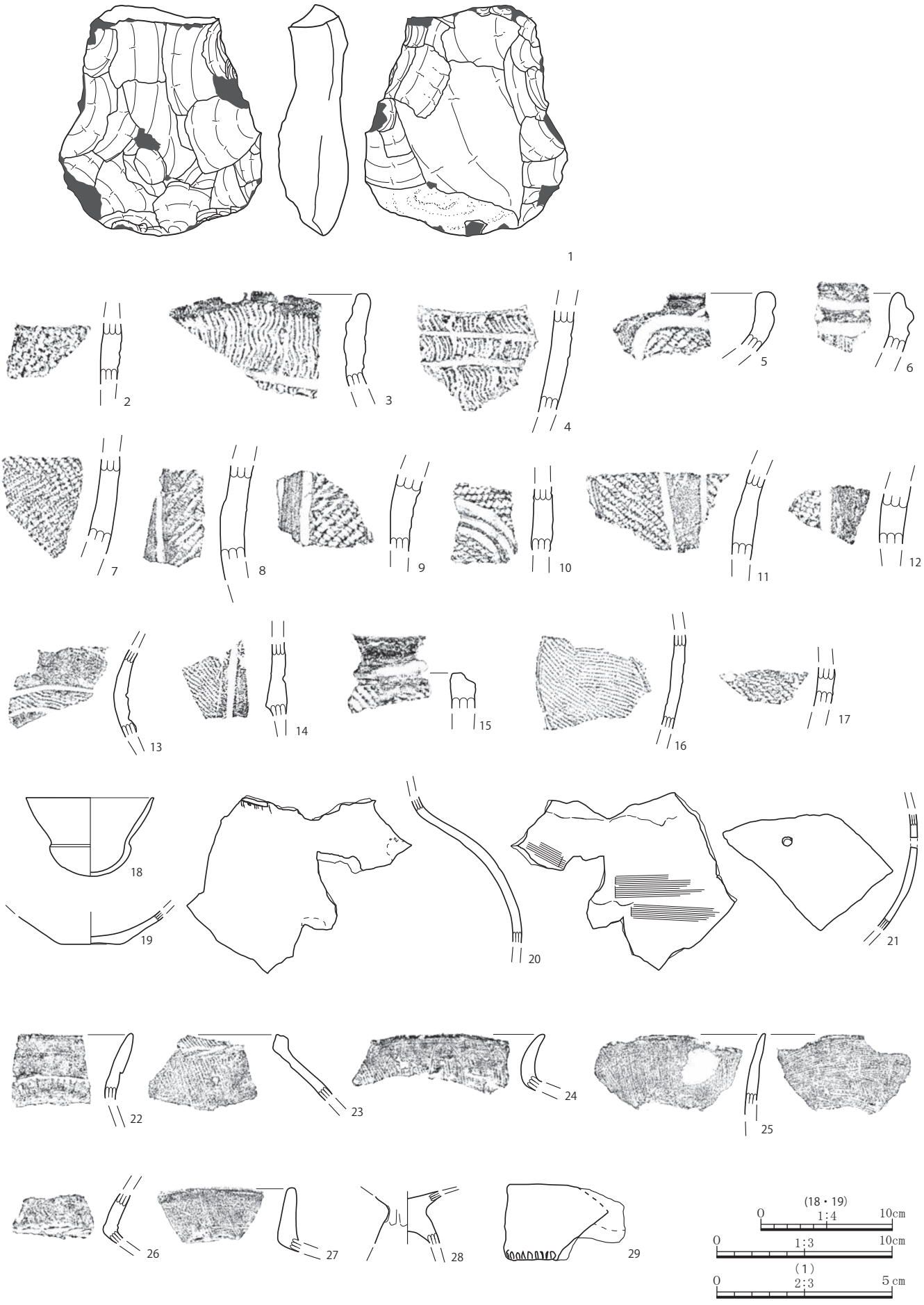
Ⅰ 1　表土　2層との境に硬化面　玉石が2ヶ所、ファイヤーピット1ヶ所、礎石（コンクリート）あり
Ⅱ 2　黒褐色 10YR3/2　粘性あり、締まりなし　ローム粒（にぶい黄褐色 10YR4/3）を1%程度含む　遺物の多く（縄文・古墳・中世）はこの層から出土
Ⅲ 3　暗褐色 10YR3/3　粘性あり、締まりややあり　湿性であり、斑鉄やヨシ等の遺存体あり　下部にいくにつれシルト質　ローム質層

a　黒褐色 10YR3/2　粘性あり、締まりなし
b　黒褐色 10YR3/2　粘性なし、締まりあり　湿性
b′ 黒褐色 10YR3/2　粘性・締まりあり　湿性
c　黒褐色 10YR2/2　粘性ややあり、締まりなし　湿性
d　暗褐色 10YR3/3　粘性あり、締まりなし
e　黒褐色 10YR2/2　粘性・締まりあり　湿性　ローム粒3%含む　張り床
f　灰黄褐色 10YR4/2　粘性あり、硬く締まる　湿性　植物痕（ヨシ等）あり　やや砂質

：焼土
：砕石

0　1:50　1 m

第18図　住居 1 平面図

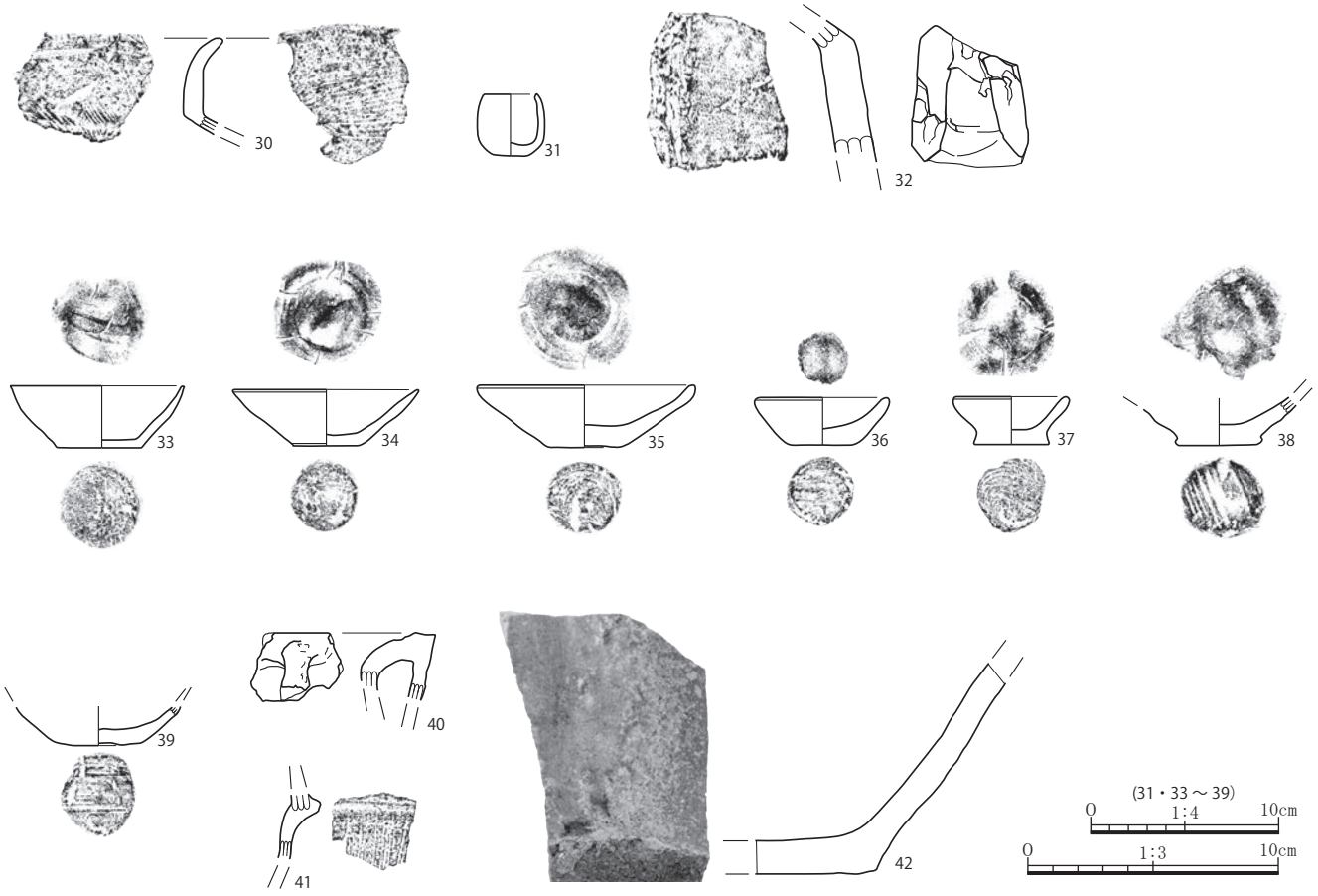

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
(18・19)
0 1:4 10cm
0 1:3 10cm
(1)
0 2:3 5cm

第19図　出土遺物

（6）まとめ

本地点は加法師遺跡の範囲とも隣接しており、加法師遺跡と同様に縄文・古墳・中近世の痕跡が確認された。

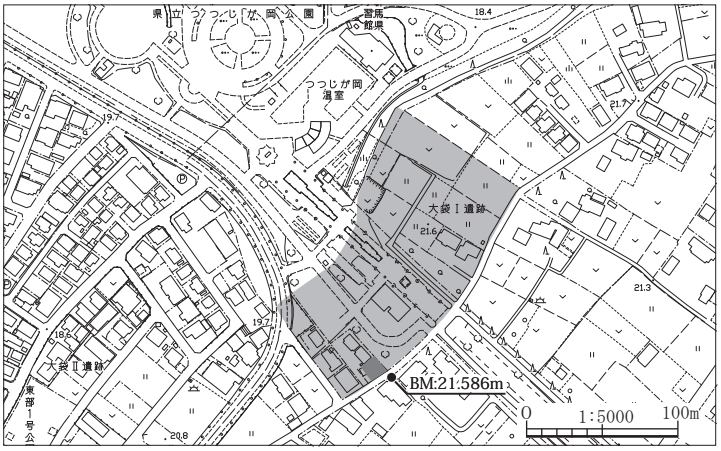
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認したため、協議が必要であると判断した。開発業者と協議をした結果、建物範囲を20㎝以上の盛土を行う計画へ変更された。30㎝程度の保護層が確保できるため「群馬県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準」により、埋蔵文化財への影響は軽微であると判断した。



第20図　出土遺物

６．大袋Ⅰ遺跡（令元地点）

遺跡番号　0066
時代種別　旧石器・縄文・弥生・平安（集落跡）
調 査 地　館林市花山町字大袋3129−５
調査原因　個人住宅
調査期間　令和２年１月９日～１月10日〔２日間〕
調査面積　約６㎡



第21図　大袋Ⅰ遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

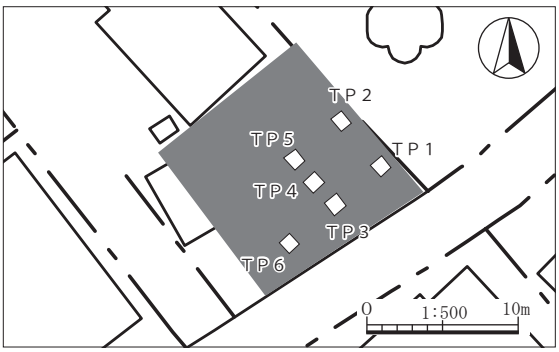
「大袋Ⅰ遺跡」は、館林市のほぼ中央部に位置する縄文時代を主とした集落跡である。鶴生田川が形成した城沼南岸の舌状台地上に広がっており、周辺は古くからの住宅もあるが農地も多く残る。

本遺跡ではこれまでに、公園整備に伴い昭和56・57年度にかけて本調査が行われている。その調査では旧石器時代の石器や縄文土器だけでなく、市内でも出土例が少ない弥生土器が出土した。

今回届出のあった土地は遺跡の北東端付近に位置し、昭和56・57年度の調査地点の隣接地であり、基準点の標高は21.586m（19.411mを移動）である。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、６箇所のテストピットを設定し、人力により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。使用した基準点は21.586mであり、機械高は23.000mとした。



第22図　調査区位置

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。

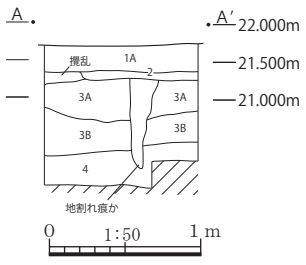
Ⅰ層は表土（層厚約20㎝）である。従前は小屋が建っていた。填圧がかけられ硬化している。Ⅱ層は黒褐色土層（10YR3/2）であり、粘性・締まりなし。Ⅲ層はローム層（褐色10YR4/4）であり、粘性あり、締まりややあり。下部は締まりが強い（３Ｂ層）。Ⅳ層は暗色帯（にぶい黄褐色10YR4/3）硬く締まり、粘性がある。

（４）確認された遺構

遺構は確認されなかった。しかし、TP４の断面で南北に延びる台地に直交する形でローム層を分断する堆積が確認された。テストピットのためその範囲などはほとんど確認できなかった。

（５）出土遺物

確認された遺物は、土師器片２点である。ほかに陶磁器の出土もあったが、従前建物の攪乱の影響か、現代のものであった。



Ⅰ　1A　表土　従前の硬化面　填圧される
Ⅱ　2　黒褐色 10YR3/2　粘性・締まりなし　黒土
Ⅲ　3A　褐色 10YR4/4　粘性あり、締まりややあり　ローム層
　　3B　褐色 10YR4/4　3Aより硬く締まる
Ⅳ　4　にぶい黄褐色 10YR4/3　粘性あり、硬く締まる　暗色帯
第23図　TP４東面セクション図

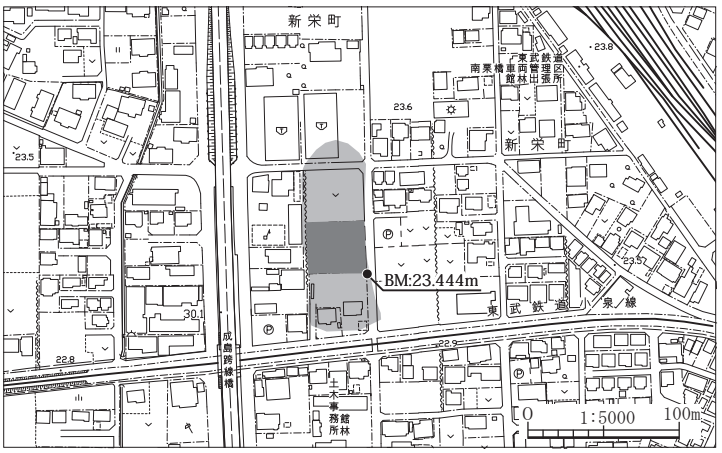
（６）まとめ

本地点は以前の遺物集中区と隣接していたが、遺物は出土しなかった。以前の調査も地表20㎝程度で遺物が確認されており、従前建物の攪乱の影響を受けているのか、分布が希薄なのか今後も周辺での調査を重ね検討していく必要がある。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。

７．天神遺跡（令元地点）

遺跡番号　0029
時代種別　平安・中世（散布地）
調 査 地　館林市新栄町字天神1934－１
調査原因　その他建物（集合住宅）
調査期間　令和２年１月16日～１月25日
　　〔内７日間〕
調査面積　約132㎡



第24図　天神遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「天神遺跡」は、市街地の北西に位置する平安時代の散布地である。邑楽・館林台地の内奥部に位置し、南方には鶴生田川が流れる。周辺は住宅地としての利用が主である。

本遺跡ではこれまでに２地点（平６・平24地点）で調査が行われている。平成６年度に行われた調査では、中世のカワラケや内耳土器などが出土した。

今回届出のあった土地は遺跡の中央付近に位置する平６地点であり、基準点の標高は23.444m（23.036mを移動）である。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に２本、南北方向に４本（計６本）のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。使用した基準点は23.444mであり、機械高は25.000mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。

Ⅰ層は表土である。層厚は、従前の集合住宅の基礎部分では100㎝程度になる。Ⅱ層は黒褐色土層（10YR3/2）であり、粘性・締まりなし（層厚約20㎝）。Ⅲ層は暗褐色土層（10YR3/3）で、Ｔ３で確認された。粘性あり、締まりややあり、湿性（層厚約15㎝）。Ⅳ層はローム質層（にぶい黄褐色10YR5/6）であり、粘性あり、締まりややあり。湿性である。

（４）確認された遺構

溝３条（溝４～６）、土坑２基（土坑１・２）、焼土が１箇所確認された。ほかに平成６年度調査時の旧トレンチ（１トレンチ～４トレンチ）、旧溝（２号溝）、旧竪穴状遺構を確認した。

溝３条は方向・幅・深さに統一性がなく、その関連・用途は不明である。溝６からは旧２号溝で出土したものより一回り大きい（高さ30㎝）空風輪が出土した。

（５）出土遺物

確認された遺物は、カワラケ、陶磁器片、五輪塔の空風輪などである。第24図－１～４の内耳鍋やカワラケ等中世に比定される。５・６の安山岩製の空風輪は形態的に転用しにくいため破棄されたものと考えられる。

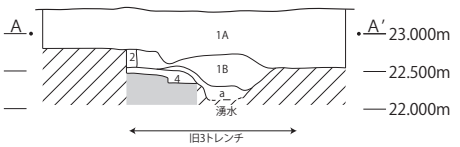
ほかに溝内から河床礫とは異なる礫数点が出土したが、用途等は不明である。

（６）まとめ

今回の調査は従前建物の建替えに伴い、工事内容が地盤改良工事を伴うことから、前回の調査内容を再検証する目的も含め実施した。特に、①標高が対照されておらず遺構確認面が不明②公図とトレンチ配置図の不整合③溝とその他遺物の出土状況が不明瞭④溝に伴う遺構検出の可能性等を明確にすることを目的とした。

調査の結果、①平６地点と同様の遺構（旧竪穴状遺構）を確認できたことから、前回調査はE.L＝24.775mを想定した。②想定図から北２m・東1.5m程度ずれていたが、旧トレンチを確認し、旧図面内で誤差の一番少ない西側境界杭を用いて公図との重ね図を作成した。③従前の集合住宅の影響もあり、残存状況は悪かったが、攪乱の少ないＴ３においても遺構外の遺物の出土はなかった。④前調査との重複も多く、溝に伴う屋敷跡などの遺構は確認できなかった。

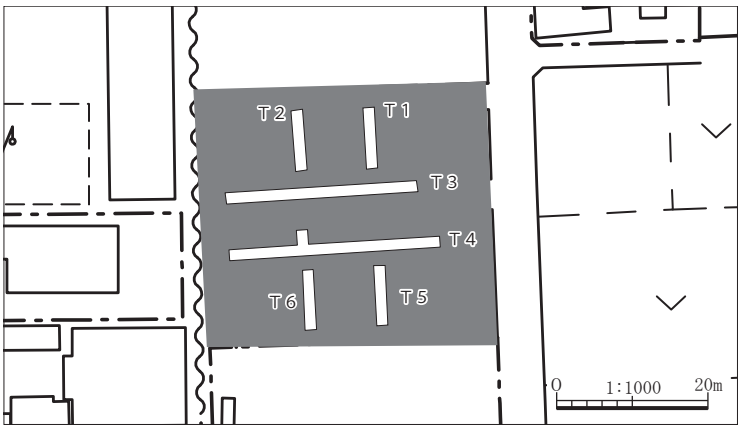
堆積状況、出土遺物の内容、確認された遺構等、前回調査と状況は同様であった。溝から出土したカワラケ・

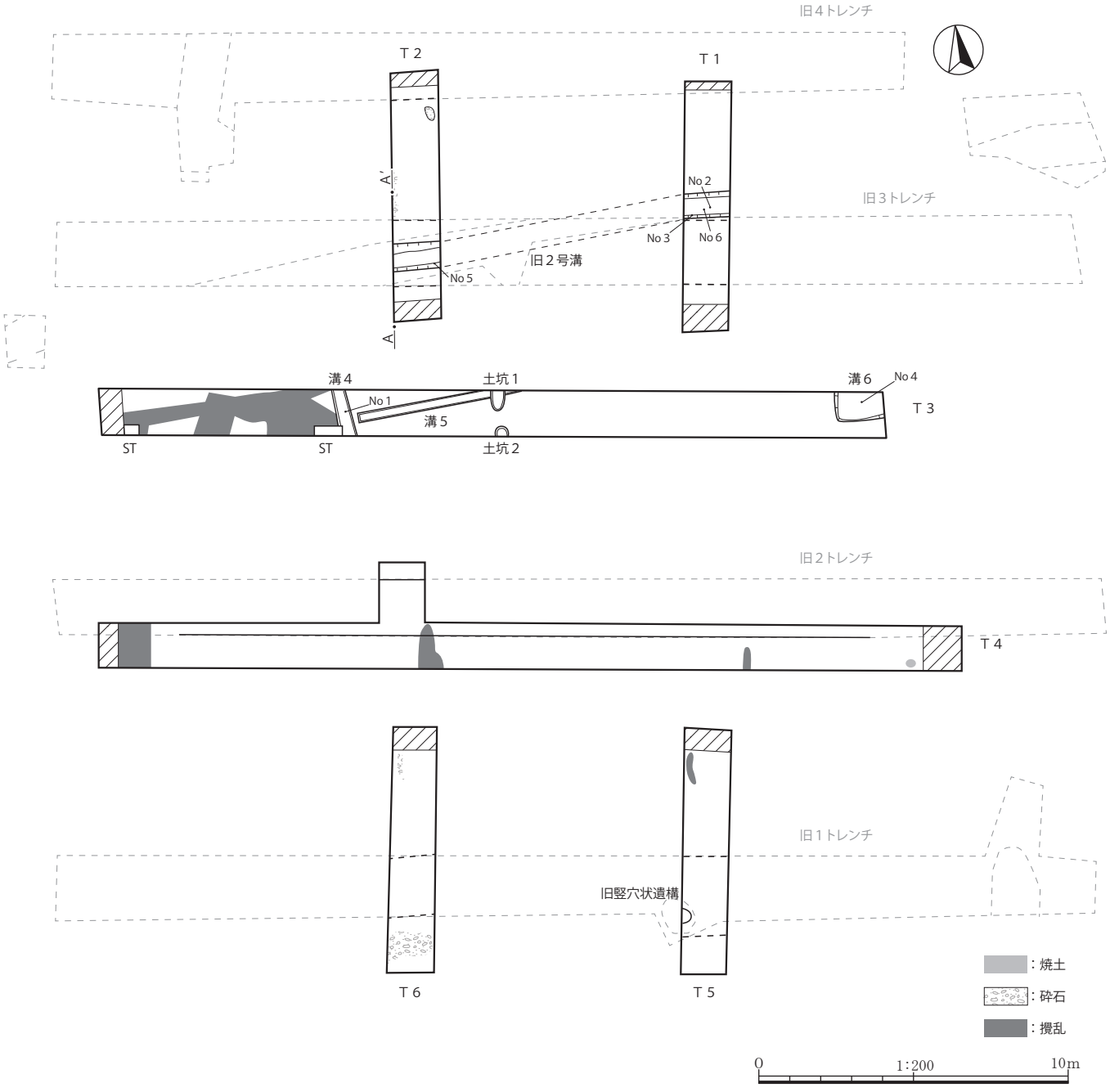


I　1A　攪乱(従前建物)
　　1B　旧トレンチ埋め戻し土
II　2　黒褐色 10YR3/2　粘性・締まりなし
III　3　暗褐色 10YR3/3　粘性あり、締まりややあり　湿性
IV　4　にぶい黄褐色 10YR5/6　粘性あり、締まりややあり　湿性　ローム質層

旧2号溝　a　黒褐色 10YR3/2　粘性・締まりなし　湿性
　　砂混じり　(旧2号溝覆土)

0　1:100　2m

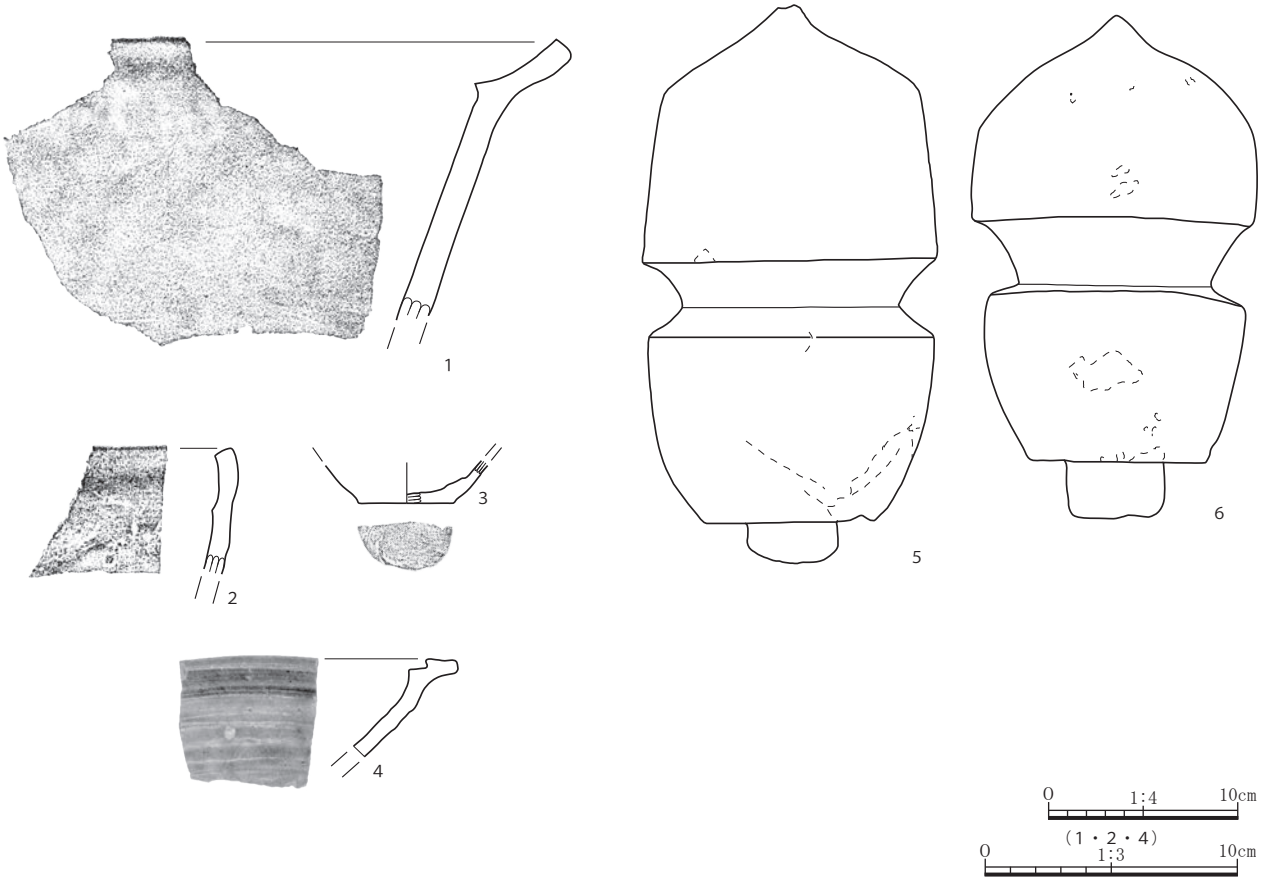




第25図　調査区位置と遺構配置

陶磁器・石製品の年代推定が必要である。また、別の溝から五輪塔の空風輪が同様の出土状況で出土したことについて、前回の調査同様に中世寺院との関連だけでなく、廃棄された事例などからも類推していく必要がある。

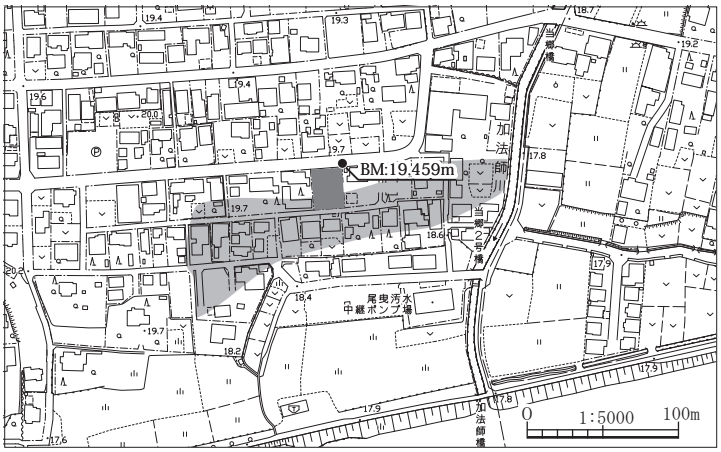
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響は少ないものと判断した。



第26図　出土遺物

８．館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡（令元地点）

遺跡番号　0033・0062
時代種別　縄文・平安・古墳・中世・近世（散布地・城館跡）
調 査 地　館林市尾曳町165−１
調査原因　その他建物（建売分譲）
調査期間　令和２年２月27日～３月11日〔内７日間〕
調査面積　約72㎡



第27図　館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡の範囲と調査地

（１）遺跡と周辺の環境

「館林城跡・城下町」は館林市のほぼ中央部に位置する近世を主とした城館跡である。「尾曳町２遺跡」は古墳時代の遺物の散布地であるが、現在まで調査は行われていない。

今回届出のあった土地は遺跡の東端付近に位置し、基準点の標高は19.459m（19.273mを移動）である。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲に合わせ、東西方向に３本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。途中、遺構のプラン確認のためテストピット（TP）を３箇所設定し、人力で掘り下げた。使用した基準点は19.459mであり、機械高は21.000mとした。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。

Ⅰ層は表土である（層厚20㎝程度）。一部ローム粒を含む硬化面があり、耕盤層と考えられる。Ⅱ層はにぶい黄褐色土層（10YR4/3）であり、粘性・締まりなし（層厚約20㎝）。Ⅲ層は黒褐色土層（10YR2/2）を中心に、下部はⅣ層への漸移的な層が堆積し、上部は粘性なし、締まりややあり（層厚約15㎝）。下層は暗褐色土層（10YR3/3）で締まりなし、粘性ややあり。Ⅳ層はローム質層（にぶい黄褐色10YR5/4）であり、粘性あり、締まりややあり。調査区南では地表20㎝で確認できる。

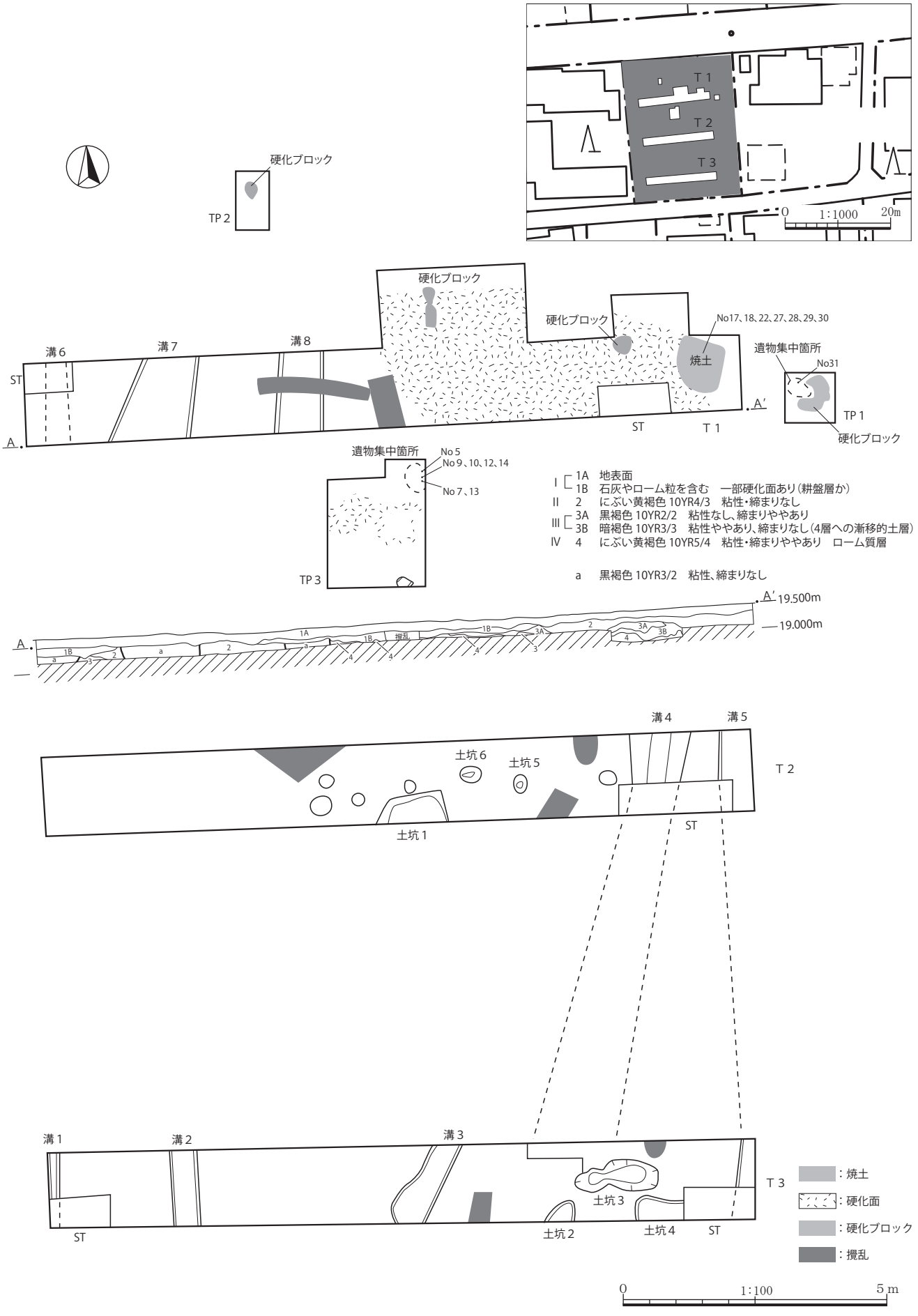
（４）確認された遺構

下級武士の長屋に関連すると考えられる基礎や礫、焼土を伴う硬化面（１箇所：カマドか）、溝８条、土坑６基が確認された。遺構は近世のものが中心であるが、溝４～６はガラス製のおはじきなどを含むことから長屋解体以降と考えられる。

長屋と想定される痕跡（第28図）は調査区北側のＴ１を中心に残されている。第30図は、東の区画の藩士屋敷図面を重ねたものである。『館林市史特別編第７巻』を執筆した佐藤孝之氏によると、「入口は北側で問題ないが、当時の長屋で基礎石を使用していたかどうかは判然としない。しかし、土盛りが確認されたのであれば礎石もあったのかもしれない。」とのことであった。土間部分には、半畳ほどの硬化面と焼土が確認できた。藩士住宅図面にはカマドの表記はなく、「…竈は記載されていないが、入り口の土間に置かれていたのだろうか。」（館林市史2018：56）と推察されている。

（５）出土遺物

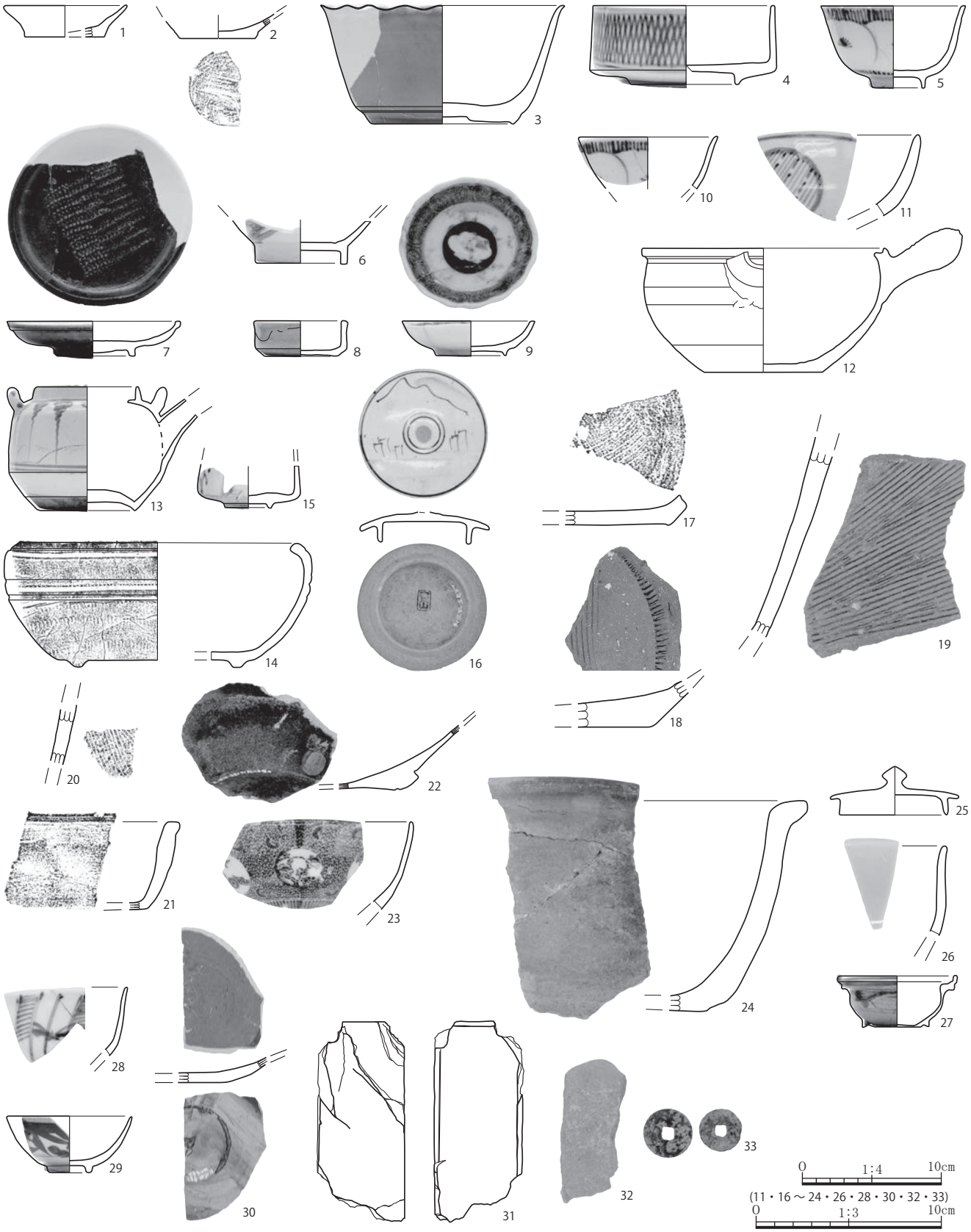
確認された遺物は、近世陶磁器を中心に、カワラケ、瓦や角釘、古銭などである。陶磁器は明治以降のものも多い。当時の長屋の屋根形状の検討も含め、花袋の生まれた長屋の時期を考える上で、より子細な時代の同定が必要になる。写真図版15−３は青磁の鉢で、底部に「ム六―二」と読める焼継ぎ時の痕跡がある。館林市立資料館に秋元家時代の藩士屋敷の間取り図が保存されており、調査地と対応する区画の図面はないが、隣接東側の区画は「と棟」となっており、この焼継ぎ時の記載も依頼を受けた建物を示すものと推察される。



第28図　調査区位置と遺構配置

（6）まとめ

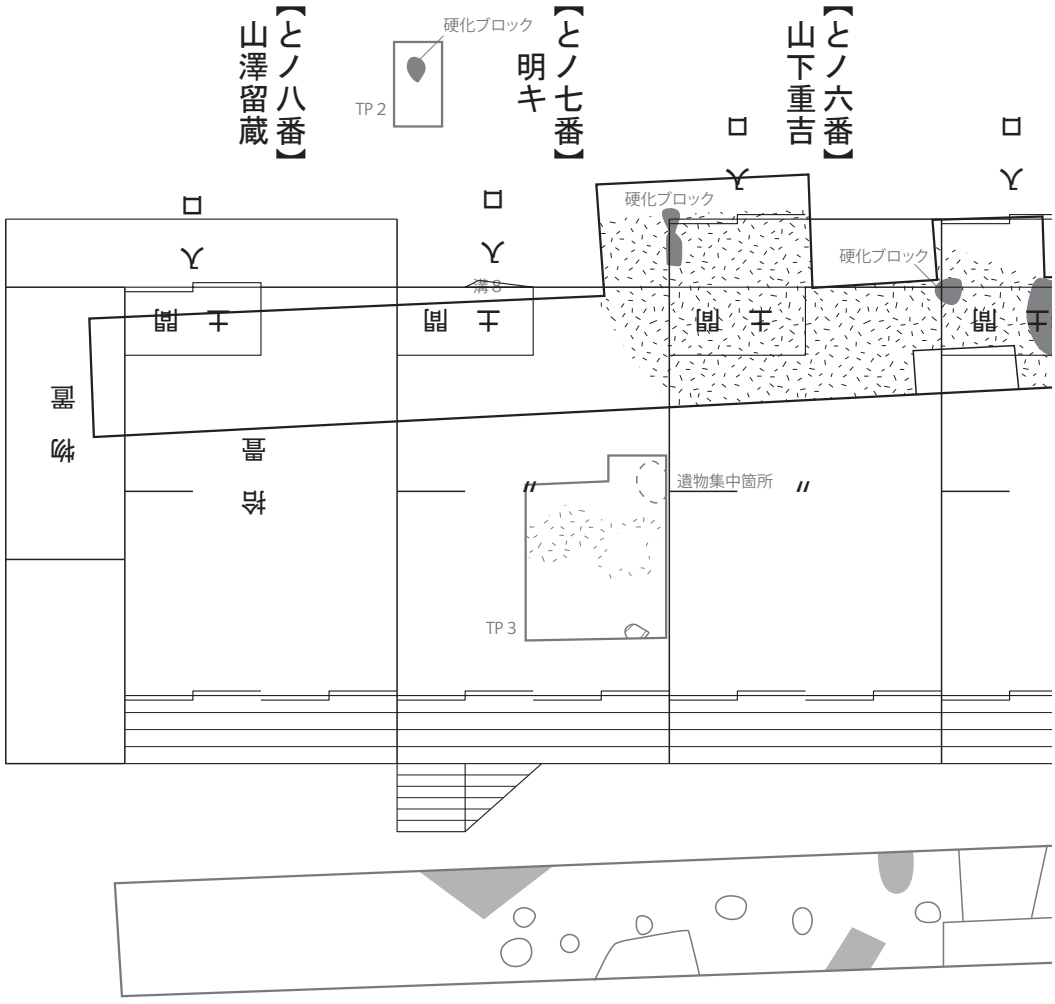
調査の結果、近世の藩士屋敷と想定される痕跡が確認されたため、開発計画との協議が必要と判断した。開発業者と協議をした結果、建物範囲を20cm以上の盛土を行う計画へ変更された。30cm程度の保護層が確保できるため「群馬県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準」により、埋蔵文化財への影響は軽微であると判断した。

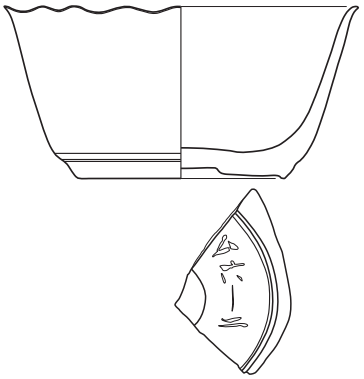


第29図　出土遺物

▲現在の区割りと「と棟」推定位置

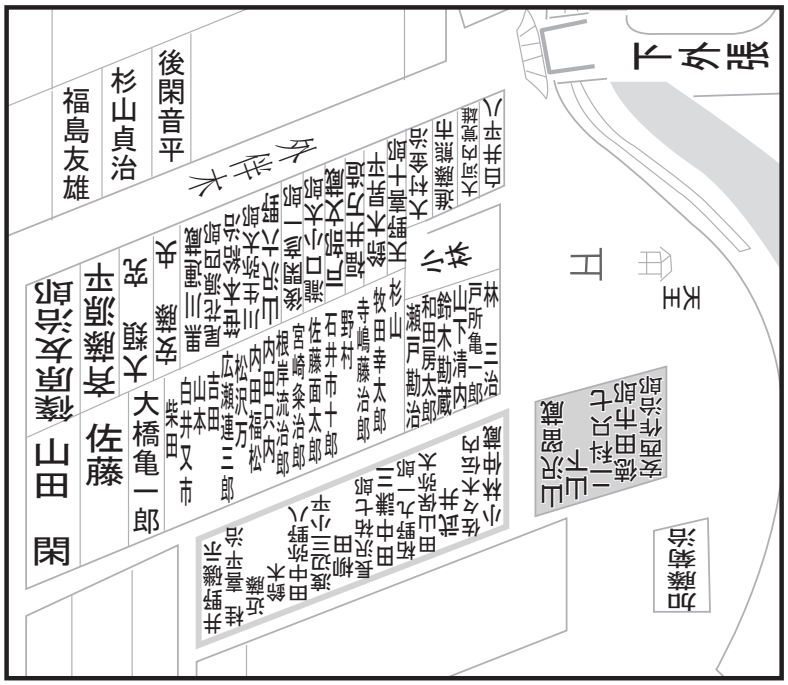
【調査地】



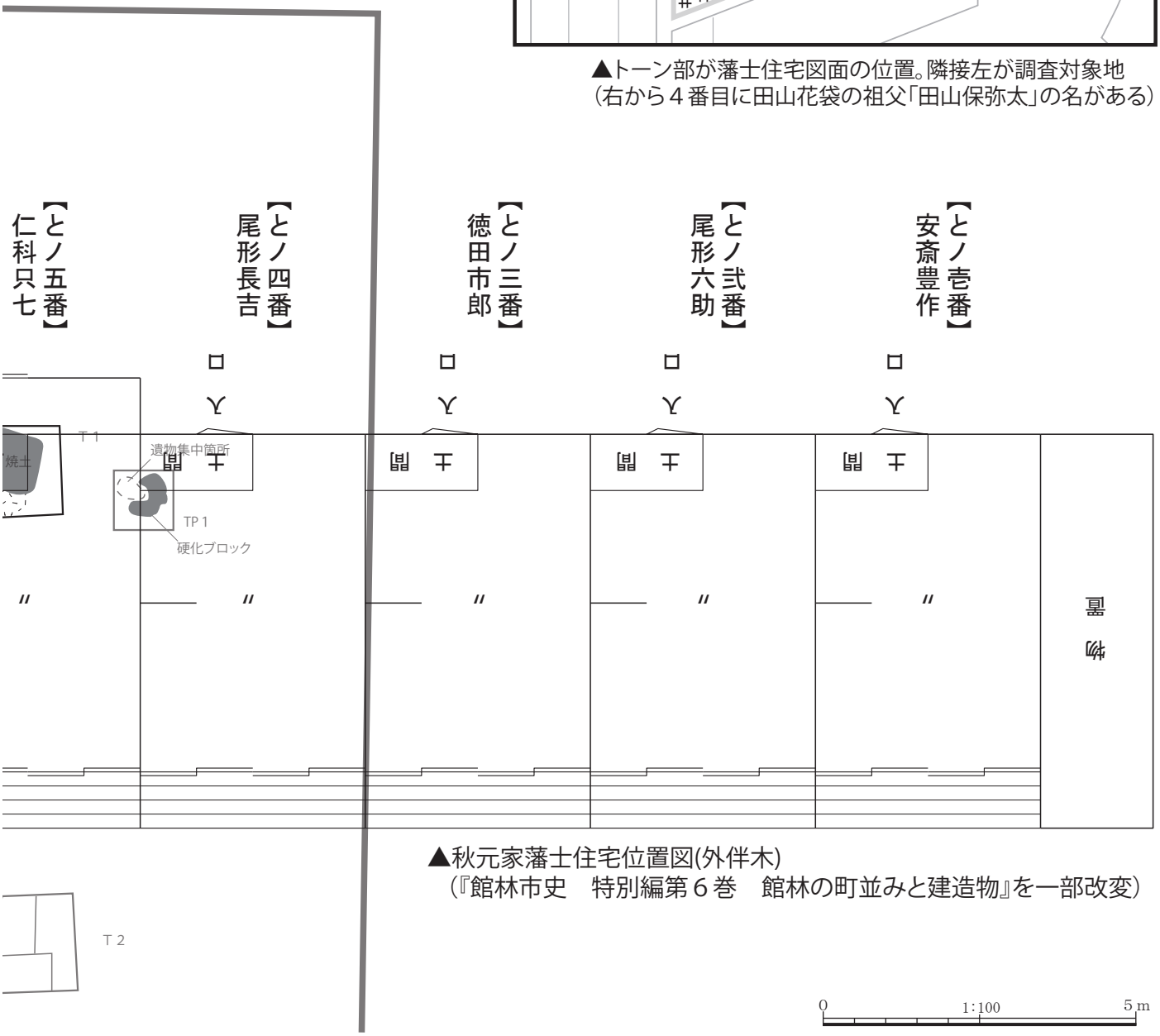


T2出土の青磁器片

第30図　秋元家の「藩士住宅図面」



▲トーン部が藩士住宅図面の位置。隣接左が調査対象地
（右から４番目に田山花袋の祖父「田山保弥太」の名がある）



▲秋元家藩士住宅位置図(外伴木)
（『館林市史　特別編第６巻　館林の町並みと建造物』を一部改変）

【と棟】と調査区遺構配置図

第１表　遺物一覧

図版番号	出土地点	種類器種	調整の特徴、残存率など	備　　考
6－1	Ｔ５	須恵器甕	胴部片	古墳
6－2	Ｔ１撹乱	カワラケ	残存率95％、底部糸切	近現代
6－3	Ｔ１撹乱	焙烙	側面被熱強	近現代
6－4	Ｔ１撹乱	火鉢	残存率90％	近現代
6－5	Ｔ１撹乱	染付	口縁部欠損	江戸末
6－6	Ｔ１撹乱	陶磁器	完形	近現代
6－7	Ｔ１撹乱	ガラス瓶	「小林外科醫院」等薬ビン	近現代
6－8	Ｔ１撹乱	銭	一銭硬貨	大正9,11年
8－1	Ｔ２	石鏃	石鏃未成品。平基無茎。	縄文、黒曜石、3.3ｇ
8－2	Ｔ３	二次加工剥片	小型縦長剥片。右側縁の中央～上部に微細剥離痕あり。	縄文、黒曜石、1.44ｇ
8－3	土坑２	剥片	小型縦長剥片。明確な２次加工は認められない。	縄文、黒曜石、1.17ｇ
8－4	Ｔ１	深鉢	撚糸Ｒを横位に施文	縄文中期
8－5	Ｔ１	深鉢	LR を施文	縄文中期
8－6	Ｔ１	深鉢	LR 端部を施文	縄文中期
12－1	Ｔ１	深鉢	胴部片	称名寺式
12－2	土坑１	深鉢	口縁部片、沈線とＬの押圧	加曽利Ｂ式
12－3	土坑１	深鉢	地紋に LR を施文	縄文後期
12－4	土坑１	深鉢	地紋に LR を施文し磨消	縄文後期
12－5	土坑１	注口土器	注口部片	縄文後期
12－6	Ｔ２	陶磁器	腰錆茶碗	近世、瀬戸美濃
15－1	Ｔ１遺物集中箇所	石核	両設打面石核。原礫面が多く残存。上端部には連続する小さな剥離痕あり。	縄文、チャート、252.43ｇ
15－2	Ｔ１遺物集中箇所	石鏃	平基無茎。先端部欠損。	縄文、チャート、0.8ｇ
15－3	Ｔ１拡張部№32	深鉢	左上から右下に向かい条痕	貝殻状痕文系
15－4	Ｔ１遺物集中箇所	深鉢	貝殻状工具で施文	諸磯式
15－5	Ｔ１拡張部№29	深鉢	撚糸Ｒ	黒浜式
15－6	Ｔ２	深鉢	Ｌを横位に施文	黒浜式
15－7	Ｔ１拡張部№25	深鉢		縄文前期
15－8	Ｔ１	深鉢	棒状工具で押し引き	阿玉台式
15－9	Ｔ１拡張部№30	深鉢	口縁部片、隆帯に篦状工具で連続刺突を施す	阿玉台式
15－10	Ｔ１拡張部№17	深鉢	区画内に平行沈線文	阿玉台式
15－11	表採	深鉢	口縁部片、連続押し引き	阿玉台式
15－12	Ｔ１拡張部№13	深鉢	RL を縦位に施す	縄文中期
15－13	Ｔ１	深鉢	口縁部片、LR を縦位に施文	縄文中期
15－14	Ｔ２	深鉢	撚糸Ｒ	加曽利Ｅ式
15－15	Ｔ１拡張部	深鉢	RL を縦位に施す	縄文中期
15－16	Ｔ１拡張部	深鉢	地紋に RL	縄文中期
15－17	Ｔ１拡張部	深鉢	LR を縦位に施す	縄文中期
15－18	Ｔ１拡張部	深鉢	撚糸Ｒ	縄文中期
15－19	Ｔ１拡張部	深鉢	口縁部片	縄文中期
15－20	Ｔ２	深鉢	LR を施す	縄文中期
15－21	Ｔ１拡張部	深鉢	口縁部片	縄文後期
19－1	表採	石斧	分銅形打製石斧。欠損	縄文、ホルンフェルス、117.6ｇ
19－2	住１覆土	深鉢	RLR を施す	縄文前期
19－3	住１	深鉢	口縁部片	連弧文系（加曽利ＥⅡ）
19－4	Ｔ１	深鉢	胴部片	連弧文系（加曽利ＥⅡ）
19－5	住１	浅鉢	口縁部片、地紋に RL	加曽利Ｅ式
19－6	Ｔ１	深鉢	口縁部片、櫛歯状工具	加曽利Ｅ式
19－7	Ｔ１	深鉢	RL 施文後、節の細かい LR を横位に施す	加曽利Ｅ式
19－8	Ｔ１	深鉢	RL を縦位に施す	加曽利Ｅ式
19－9	Ｔ１	深鉢	RL を縦位に施す	加曽利Ｅ式
19－10	住１覆土	深鉢	LR を施す	加曽利Ｅ式
19－11	住１	深鉢	地紋に LR を縦位に施し、磨消	称名寺式
19－12	Ｔ１	深鉢	RL を縦位に施す	称名寺式
19－13	住１覆土	深鉢	地紋に LR を施し、磨消	称名寺式
19－14	Ｔ１	深鉢	地紋に LR を縦位に施す	称名寺式
19－15	Ｔ１	深鉢	口縁部片、LR を縦位に施文	縄文後期
19－16	住１覆土	深鉢	LR を施す	縄文後期
19－17	住１覆土	深鉢	LR を施す	縄文
19－18	住１	坩	残存率70％	古墳前期
19－19	住１	甕	底部片	古墳前期
19－20	住１覆土	甕	頸部～胴部片	古墳前期
19－21	住１覆土	壺	焼成後に穿孔する	古墳前期
19－22	住１	土師器甕	複合口縁	古墳前期
19－23	住１	土師器甕	頸部～胴部片	古墳前期
19－24	住１覆土	壺	複合口縁	古墳前期
19－25	住１覆土	土師器甕	口縁部片	古墳前期
19－26	住１覆土	土師器甕	口縁部～胴部片	古墳前期
19－27	住１覆土	土師器甕	口縁部片	古墳前期
19－28	住１	高坏		古墳前期
19－29	Ｔ１	壺	複合口縁、ヘラ状工具による連続刺突	古墳前期
20－30	Ｔ１	土師器甕	口縁部片	古墳前期
20－31	住１覆土	手捏ね土器	残存率60％	古墳前期
20－32	Ｔ１	羽口		古墳前期
20－33	住１覆土	カワラケ	残存率70％、底部糸切、内部圧痕	中世
20－34	住１覆土	カワラケ	残存率50％、底部糸切後調整、内部圧痕	中世
20－35	住１覆土	カワラケ	残存率70％、底部糸切後調整	中世
20－36	住１	カワラケ	完形､底部糸切後板による調整、内部圧痕	中世
20－37	住１覆土	灯明皿	残存率90％、底部糸切後板による調整	
20－38	住１覆土	カワラケ	底部糸切後板による調整	
20－39	住１	カワラケ	底部糸切後板による調整、内部ヘラナデ	
20－40	住１覆土	内耳土器	内耳部	中近世
20－41	住１覆土	すり鉢	口縁部片	中近世、丹波か
20－42	Ｔ１	陶磁器甕	底部片	中近世、常滑
26－1	Ｔ３溝４	内耳鍋	口縁部片	15Ｃ末
26－2	Ｔ１旧２号溝№２	焙烙	口縁部片	15Ｃ末
26－3	Ｔ１旧２号溝№７	カワラケ	底部片、底部糸切	15Ｃ終末
26－4	Ｔ２旧２号溝	陶磁器甕	口縁部片	中世、常滑
26－5	Ｔ３溝６	五輪塔	空風輪	
26－6	Ｔ１旧２号溝	五輪塔	空風輪	
29－1	Ｔ２	カワラケ	底部糸切痕	中世か
29－2	土坑３	カワラケ	底部糸切後板による調整	
29－3	Ｔ２	青磁鉢	残存率35％､「ム六一二」焼継ぎ	近世、肥前系
29－4	TP３	染付重箱	残存率30％、焼継ぎ	近世
29－5	TP３	染付碗	残存率90％	近世
29－6	Ｔ１	陶磁器広東茶碗		江戸～明治
29－7	TP３	陶磁器薬味皿	残存率80％	明治～大正、北関東か
29－8	Ｔ１	陶磁器	残存率40％	明治～大正
29－9	TP	陶磁器	完形、型押し、花弁口縁	明治～大正
29－10	TP３	染付碗	口縁部片	明治～大正
29－11	TP３	染付碗	口縁部片	近世
29－12	TP３	雪平	残存率95％	近現代
29－13	TP３	土瓶	残存率90％、白土をかける。	明治～大正、益子か
29－14	TP３	火鉢	残存率20％	明治～大正
29－15	Ｔ１	染付碗	高台付	近世
29－16	Ｔ１	陶器土瓶蓋	蓋部	近現代、益子か
29－17	Ｔ１硬化面集中	すり鉢	底部片	江戸末、明石・堺
29－18	Ｔ１硬化面集中	すり鉢	底部片	江戸末、明石・堺
29－19	Ｔ１	すり鉢		近現代
29－20	TP３	すり鉢		近現代、明石・堺
29－21	Ｔ１	焙烙	口縁底部	近現代
29－22	Ｔ１硬化面集中	土瓶	底部片	近現代
29－23	TP３	陶磁器	型紙	明治～大正
29－24	Ｔ１	鍋	口縁部片	明治～大正
29－25	TP３	陶器蓋	残存率50％	近現代
29－26	Ｔ２	青磁	口縁部片	近現代
29－27	土坑１覆土	鍋	完形、ミニュチュア、形骸化した把手が付く。	明治～大正
29－28	Ｔ１硬化面集中	染付碗	口縁部片	近現代
29－29	Ｔ１硬化面集中	陶磁器碗		近現代
29－30	Ｔ１硬化面集中	灯明皿	底部片	近現代
29－31	TP１	硯		近現代、195.1ｇ
29－32	Ｔ１	砥石		近現代、91.0ｇ
29－33	Ｔ１	銭	銘不明	近世

写　真　図　版

１　調査区全景

２　土木重機による掘削

３　トレンチ５ 深掘部土層断面（東面）

４　トレンチ２ 土層断面（北面）

５　トレンチ１ 土層断面（南面）

６　トレンチ２ 精査後（東から）

７　調査完了

１　調査区全景

２　トレンチ３ 炭焼窯焼土範囲

３　トレンチ３ 炭焼窯土層断面（南面）

４　トレンチ２ 精査後（北から）

５　トレンチ３ 精査後（南から）

６　土木重機による埋め戻し

７　調査完了

1　調査区全景

3　トレンチ２ 土層断面（北面）

2　トレンチ１ 精査前（東から）

4　トレンチ１ 精査後（東から）

5　トレンチ２ 精査後（西から）

6　トレンチ１ 土坑１

7　調査完了

１　土木重機による掘削

３　トレンチ２ 深掘部土層断面（南面）

２　トレンチ１ 精査前（西から）

４　トレンチ１ 拡張部遺物出土状況

５　石核出土状況

６　トレンチ２ 精査後（北から）

７　調査完了

1　土木重機による掘削

2　住居 1 精査前

3　トレンチ西面 焼土坑

4　トレンチ西面 焼土範囲

5　住居 1 範囲確認（北から）

6　住居 1 範囲確認（南から）

7　住居 1 土層断面（北面）

8　住居 1 遺物出土状況

9 住居 1 出土遺物

10 住居 1 精査後（西から）

12 トレンチ 精査後（南から）

11 住居 1 精査後（北から）

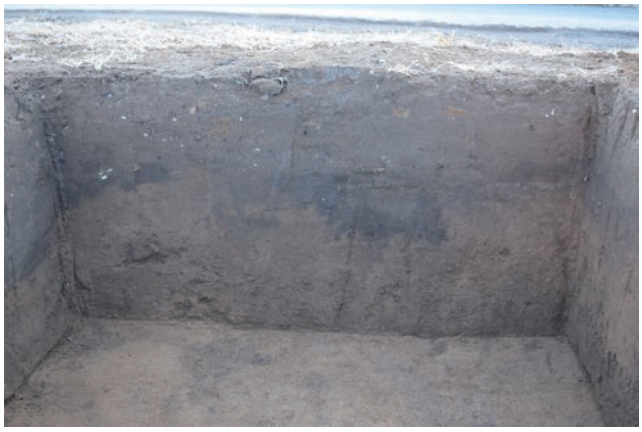
13 トレンチ 精査後（北から）

14 土木重機による埋め戻し

15 調査完了

1　調査区全景

2　TP 精査前


3　TP３ 土層断面（東面）

4　TP６ 土層断面（東面）

5　TP４ 土層断面（東面）

6　TP４ 土層断面（東面）

7　人力による埋め戻し

8　調査完了

1　土木重機による掘削

2　トレンチ２ 土層断面（西面）

3　トレンチ４ 精査前（東から）

4　トレンチ２ 旧２号溝（西面）

5　トレンチ１（旧２号溝）遺物出土状況

6　トレンチ３ 精査後（西から）

7　調査完了

1　調査区全景

2　トレンチ１ 精査前（東から）

3　トレンチ１ 黒褐色土

4　トレンチ１拡張部 建物基礎

5　トレンチ１拡張部 精査後（南から）

6　トレンチ１東側 焼土

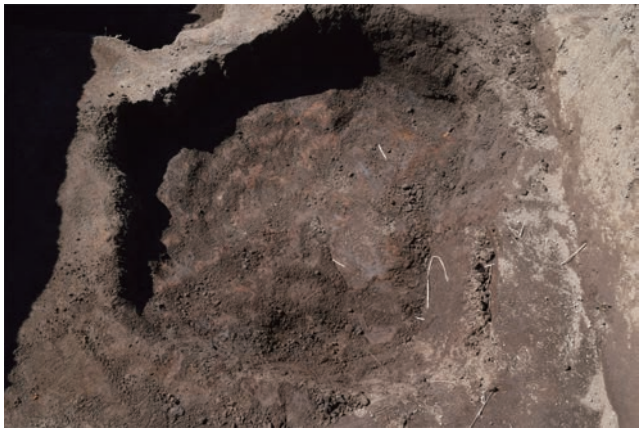
7　TP 2 建物基礎

8　TP 3 遺物出土状況

9　トレンチ 1 精査後（東から）

10　トレンチ 2 精査後（東から）

11　トレンチ 3 精査後（東から）



12　トレンチ 1 東側 焼土

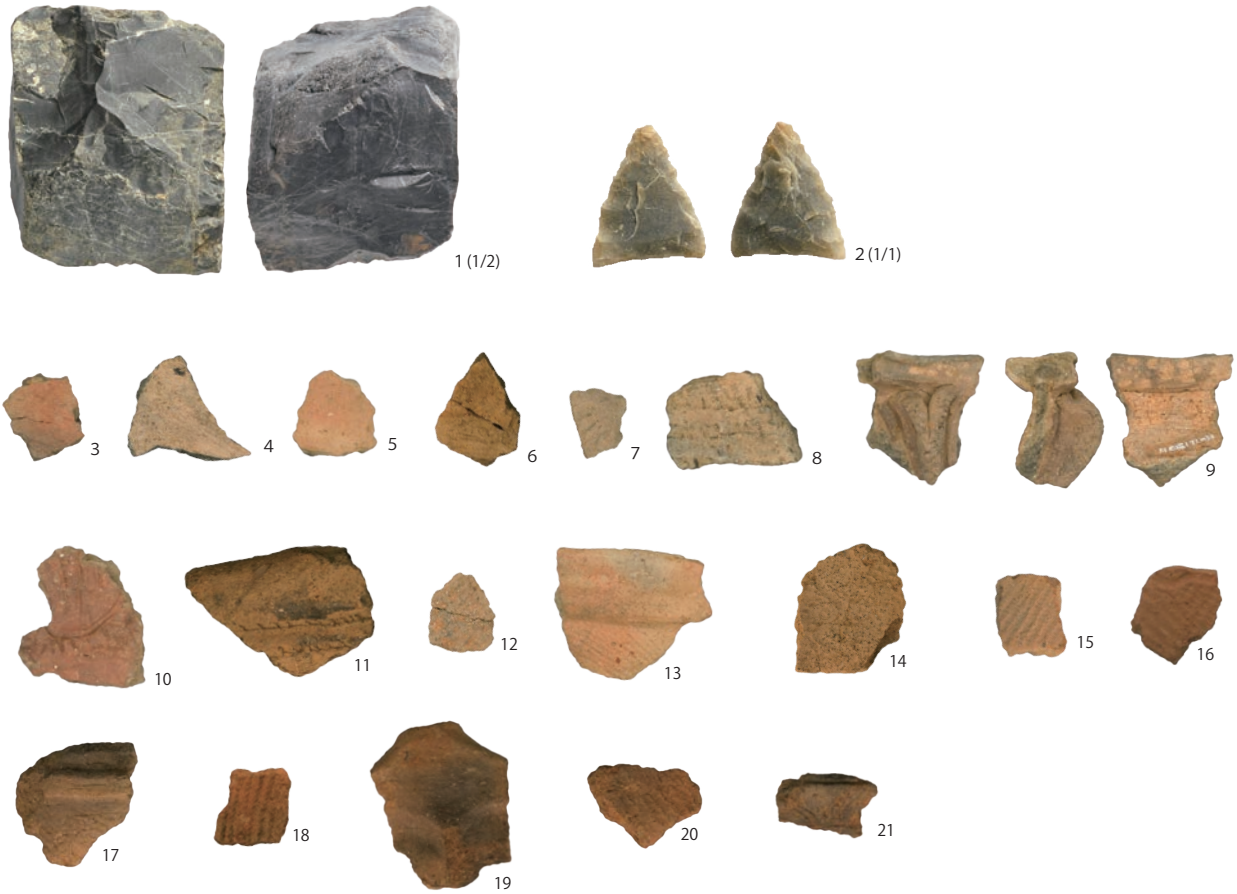
13　調査完了

1．広内町 1 遺跡（平 31 地点）

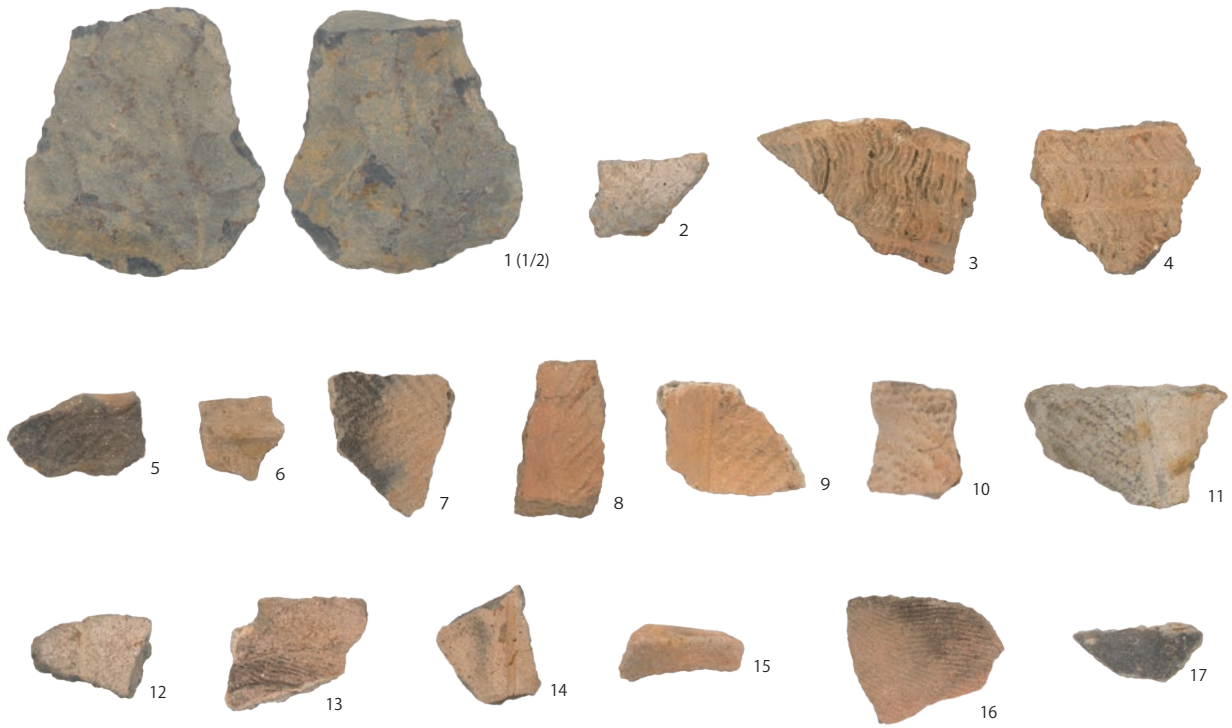
2．北小袋遺跡（令元地点）

3．大街道遺跡（令元地点）

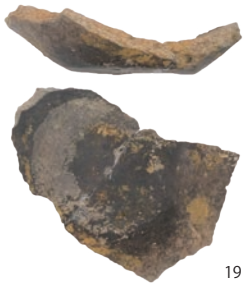
4．間堀１遺跡（令元地点）

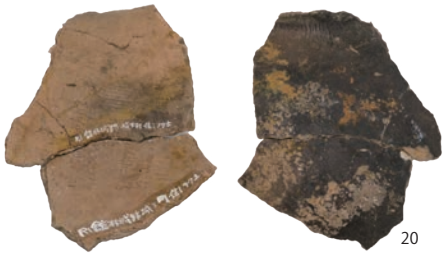


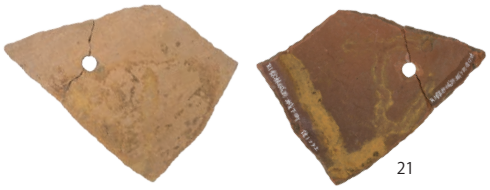
5．館林城跡・城下町（令元地点）



18


19


20


21

22

23

24

25

26

27

28

29

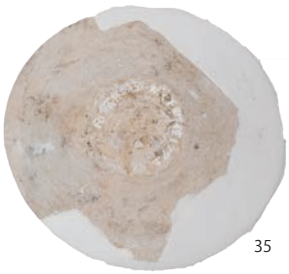
30

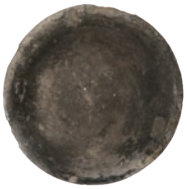
31

32

33

34


35



36

6．天神遺跡（令元地点）

7．館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡（令元地点）

18

19

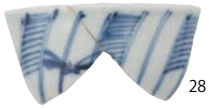
20

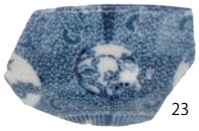
21

22

24

26


28


23

25

27

29

30

31

32

33

抄　　録

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ		
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書		
副書名	平成31年度・令和元年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査	巻次	――――――
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第58集
編集者名	宮田　圭祐	編集機関	館林市教育委員会
編集機関所在地	〒374-0018　群馬県館林市城町３番１号　TEL 0276-74-4111　FAX 0276-74-4113		
発行年月日	2021(令和３)年３月１日		
市町村コード	102075		

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
広内町１遺跡（ひろうちちょう）（平31地点）	館林市広内町1277番１、1277番３（たてばやしひろうちちょう）	0035	36°15′26″	139°32′18″	20190416～20190423	約238㎡	宅地造成
間堀１遺跡（まぼり）（令元地点）	館林市上赤生田町上ノ前3465-５（たてばやしかみあこうだちょうかみまえ）	0116	36°13′33″	139°32′39″	20190510～20190523	約166㎡	その他開発（太陽光発電）
北小袋遺跡（きたこぶくろ）（令元地点）	館林市近藤町字北小袋171-53、171-54、171-55（たてばやしこんどうちょうあざきたこぶくろ）	0054	36°14′15″	139°30′38″	20190726～20190801	約93㎡	その他開発（太陽光発電）
大街道遺跡（おおかいどう）（令元地点）	館林市大街道三丁目970-４、972-５（たてばやしおおかいどうさんちょうめ）	0031	36°15′24″	139°31′31″	20191108～20191115	約46㎡	個人住宅
館林城跡・城下町（たてばやしじょうせきじょうかまち）（令元地点）	館林市加法師町2849-１（たてばやしかぼうしちょう）	0033	36°15′０″	139°32′51″	20191129～20191207	約30㎡	個人住宅
大袋Ⅰ遺跡（おおぶくろ）（令元地点）	館林市花山町字大袋3129-５（たてばやしはなやまちょうあざおおぶくろ）	0066	36°14′24″	139°33′６″	20200109～20200110	約６㎡	個人住宅
天神遺跡（てんじん）（令元地点）	館林市新栄町字天神1934-１（たてばやししんさかえちょうあざてんじん）	0029	36°15′５″	139°31′15″	20200116～20200125	約132㎡	その他建物（集合住宅）
館林城跡・城下町（たてばやしじょうせきじょうかまち）、尾曳町（おびきちょう）２遺跡（令元地点）	館林市尾曳町165-１（たてばやしおびきちょう）	0033 0062	36°14′45″	139°33′３″	20200227～20200311	約72㎡	その他建物（建売分譲）

遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広内町１遺跡（平31地点）	散布地	平安	なし	土師器片、陶磁器片、硬貨	
間堀１遺跡（令元地点）	集落跡	旧石器、縄文、古墳	土坑12	石器、縄文土器片	
北小袋遺跡（令元地点）	散布地	旧石器、縄文	炭焼き窯１、土坑６	石器、縄文土器片	炭焼き窯
大街道遺跡（令元地点）	散布地	縄文、平安	土坑１	縄文土器片、陶磁器片	
館林城跡・城下町（令元地点）	城館跡・散布地	縄文、平安、中世、近世	住居址１、焼成土坑１	縄文土器片、土師器片	焼成土坑
大袋Ⅰ遺跡（令元地点）	集落跡	旧石器、縄文、弥生、平安	なし	土師器片	
天神遺跡（令元地点）	散布地	平安、中世	溝３、土坑２、焼土１	土師器片、陶磁器片、石造物	
館林城跡・城下町、尾曳町２遺跡（令元地点）	城館跡、散布地	縄文、古墳、平安、中世、近世	溝８、土坑６、焼土硬化面	陶磁器片、瓦、釘、古銭	焼土硬化面

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第58集

館林市内遺跡発掘調査報告書

― 平成31年度・令和元年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 ―

編集・発行　館林市教育委員会
〒374-8501　群馬県館林市城町１番１号　電話0276-72-4111
印　　刷　朝日印刷工業株式会社
発行年月日　令和３年３月１日

©Tatebayashi City Board of Education 2021 Printed in Japan